

熊本県文化財調査報告 第113集

庵ノ前遺跡 I・II

熊本県立熊本北高等学校登校道路建設に伴う埋蔵文化財調査

1991年

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第113集

# 庵ノ前遺跡 I · II

熊本県立熊本北高等学校登校道路建設に伴う埋蔵文化財調査



(庵ノ前遺跡Iより熊本北高校を眺む)

1991年

熊本県教育委員会

## 序 文

熊本県教育委員会では、熊本県立熊本北高等学校(熊本市清水町榆木)の登校道路建設に伴い、昭和63年(1988)10月13日から11月2日にかけて道路建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、平成2年度に調査報告書の作成を行いました。

調査の結果、縄文早期の土器や黒髪式土器を伴う弥生中期の住居址を検出するなどの成果をあげることができましたので、これらの成果を本報告書に記載しました。

また、この調査報告書には、熊本県教育委員会が昭和57年(1982)の熊本北高等学校設立時に実施しました、工事用取付道路箇所「庵ノ前遺跡Ⅱ」の発掘調査結果も収録しております。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術、研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査に際しましては、地元の方々や、熊本北高等学校長ならびに、同校教諭の杉村彰一氏からは適切な御指導・御協力をいただきました。

ここに心から厚くお礼を申し上げます。

平成3年2月28日

熊本県教育長 松村 敏人

本報告書では、昭和63年度の登校道路建設を契機とした発掘調査のまとめを「庵ノ前遺跡Ⅰ」とし、高校設立時(昭和57年度)の工事用取付道路箇所の調査結果を「庵ノ前遺跡Ⅱ」とした。

#### 例　　言

##### 「庵ノ前遺跡Ⅰ」

1. 本書は、熊本県立熊本北高等学校の登校道路建設に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、熊本市清水町倫木に所在する「庵ノ前遺跡Ⅰ」で、熊本県教育庁施設課から予算の令達を受けて、県文化課が行った。
3. 発掘調査は昭和63年10月13日から11月2日にかけて実施し、出土遺物と図面の整理は同年度に行った。報告書作成については、平成2年度に行った。出土遺物や資料等は県文化課で保管している。
4. 発掘調査は大田幸博〔文化財保護主事〕・松舟博満・松尾葉子(旧姓 原)〔文化課嘱託〕がその任にあたった。
5. 発掘調査過程の写真撮影と整理後の出土遺物写真撮影は、大田が行った。
6. 出土遺物の実測は大田が行い、山下志保氏〔熊本大学文学部考古学研究室：院生〕の協力を得た。さらに、石器については松舟が担当した。
7. 道構及び遺物の製図は石工みゆき・坂田敬子(旧姓 宮崎)〔臨時職員〕が行った。
8. 本書の執筆は大田が行い、一部を松舟が担当したが、腰 昭志が総括した。
9. 出土遺物の整理は県文化課人吉調査事務所で行い、事務所敷地については県衛生部と人吉保健所の協力を得た。
10. 本書の編集は大田が行い、溝口真由美〔臨時職員〕の助力を得た。

##### 「庵ノ前遺跡Ⅱ」

庵ノ前遺跡Ⅱの調査結果は、昭和57年度の調査担当者である緒方 紘〔前文化課参事〕・木崎康弘〔現文化課文化財保護主事〕の調査に関する発表資料の転載である。

## 本文目次

### 庵ノ前遺跡 I

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査に至る経緯	1
第3節 調査の経過	3
第4節 遺跡の位置と歴史的環境	4
第Ⅱ章 調査の成果	7
第1節 層位	7
第2節 調査区の設定	7
第3節 1区	9
第4節 2区	14
第5節 3区	14
第Ⅲ章 出土遺物	15
(1) 弥生式土器	15
(2) 繩文式土器	18
(3) 石器	22
第Ⅳ章 まとめ	24

### 庵ノ前遺跡 II

「日本考古学年報 35」 1982年度版 日本考古学協会	緒方 勉	25
「日・壱・肥 古文化研究会 繩文時代の生活遺跡」 1982年 長湯シンポジウム実行委員会		
木崎康弘		31
総括 横昭志		39

## 図版目次

第1図 調査区周辺地形図	2	第5図 土層位図	7
第2図 庵ノ前遺跡位置図	4	第6図 調査区域図	8
第3図 庵ノ前遺跡周辺地形図	5	第7図 調査1区実測図	9
第4図 周辺遺跡分布図	6	第8図 1区土層断面図①	10

第9図	1区土層断面図②	10	第23図	出土遺物実測図(7)	23
第10図	住居址実測図①	11	第24図	庵ノ前遺跡の位置と周辺遺跡	26
第11図	住居址実測図②(遺物出土状況)	12	第25図	竪穴住居址(1~3号)	27
第12図	柱穴1・2群実測図	13	第26図	土壤(1~3号)	28
第13図	調査2区実測図	14	第27図	Ⅲ層下面及びⅣ層出土土器(1)	29
第14図	2区土層断面図	14	第28図	Ⅲ層下面及びⅣ層出土土器(2)	30
第15図	3区トレントA層位図	14	第29図	周辺遺跡分布図	31
第16図	3区トレントB層位図	14	第30図	竪穴住居址部分遺物垂直分布図 層位略図	32
第17図	出土遺物実測図(1)	16	第31図	竪穴住居址(1~3号)実測図	34
第18図	出土遺物実測図(2)	17	第32図	竪穴住居址(4号)実測図	35
第19図	出土遺物実測図(3)	19	第33図	土壤実測図	36
第20図	出土遺物実測図(4)	20	第34図	発掘区及び遺物分布図	37
第21図	出土遺物実測図(5)	21			
第22図	出土遺物実測図(6)	22			

#### 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	6	第4表	柱穴1群計測表	13
第2表	1区の出土遺物について	9	第5表	柱穴2群計測表	13
第3表	住居址内検出のピット計測表	11	第6表	石器計測表	23

#### 写 真 図 版

##### 庵ノ前遺跡 I

図版1 調査区全景(北高校側より望む) 住居址検出状況(1) 住居址検出状況(2)

図版2 住居址検出状況(3) 柱穴検出状況 Ⅱ区における岩盤検出状況

図版3 出土遺物

図版4 出土遺物

##### 庵ノ前遺跡 II

図版5 遺構全景 1~3号住居址 4号住居址

図版6 1号土壤 2号土壤 3号土壤

図版7 出土遺物

# 庵ノ前遺跡 I



# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	江崎 正（文化課長）
調査総括	隈 昭志（教育審議員）
整理総括	桑原恵彰（文化財調査第2係長）
発掘調査	大田幸博（文化財保護主事） 松舟博満・原 葉子（嘱託）
報告書	大田幸博 松舟博満 石工みゆき・溝口真由美・宮崎敬子（臨時職員）
調査事務局	〔昭和63年度〕林田敏嗣（課長補佐） 松崎厚生（主幹・経理係長） 上村祐司・泉野順子（主事） 〔平成2年度〕中川義孝（課長補佐） 上村忠道（経理係長） 大広美枝子・川上勝美（主事）
施設課	〔昭和63年度〕福生 勉（課長） 永吉豊志（財産係長） 本 芳幸（主事） 藤山徹雄（主幹・施設係長） 古賀正治（参事） 〔平成2年度〕瀧谷仁一（課長） 永吉豊志（主幹・財産係長） 藤山徹雄（主幹・施設係長）

## 第2節 調査に至る経緯

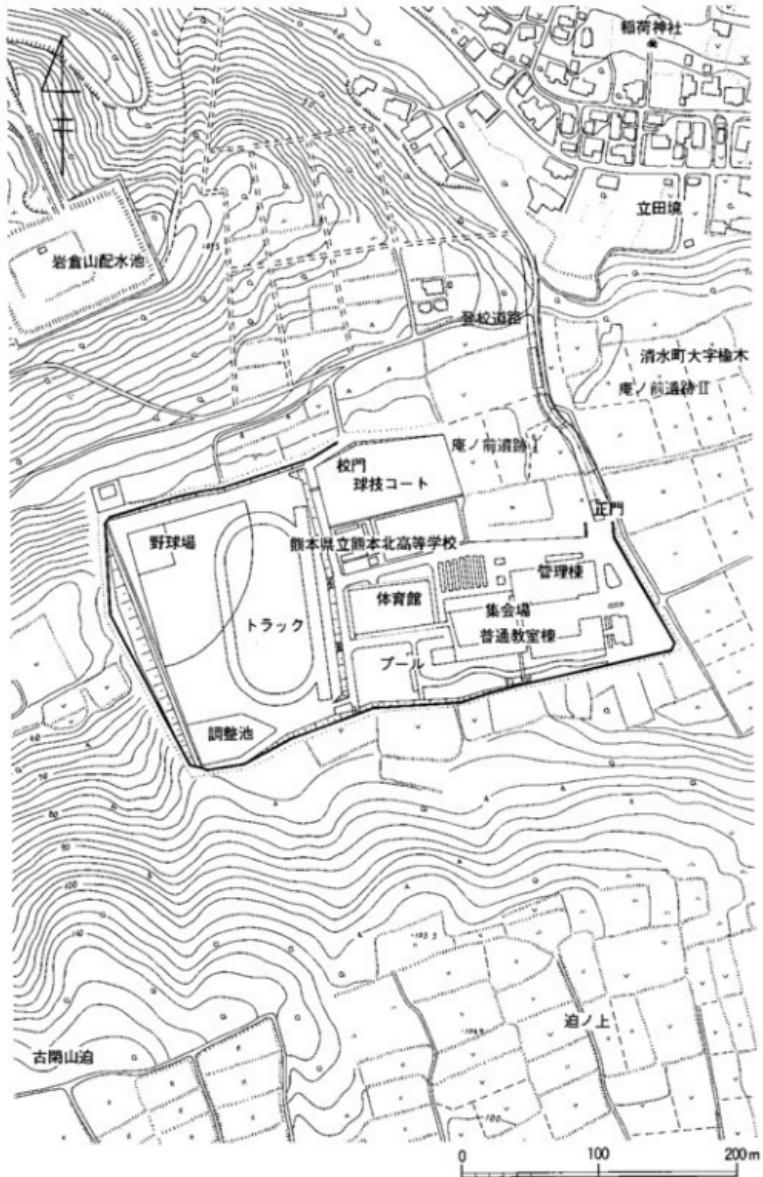
熊本県立熊本北高等学校（昭和57年10月1日設立）では、昭和63年度に学校北側の県道託麻・北部線へ通じる登校道路を新設する事になったが、工事区域は「庵の前遺跡」（昭和57年の学校設立時における工事用取付け道路部分の発掘調査で、縄文早期の住居址が検出されている。）の西端域にあたる所から、文化課では施設課に対し、発掘調査の必要な事を伝えた。

調査に際しては、春先に第2調査係で現地調査を行い、周辺地の状況からして（丘陵地の北縁域）道路予定地は縄文遺跡であるとの判断をし、試掘は必要無しと判断した。従って、調査は、当初から本調査の体制で臨み、昭和63年10月13日から開始したが、予想に反して、大方の調査区は、表土下において地山の露頭する所であり、わずかに北端寄りの個所において弥生時代後期の住居址を一軒、検出するに止まった。

従って、全長約133m・幅10mの道路建設予定地を全面調査したにもかかわらず、11月2日に全調査を終了した。正味15日間の調査であった。発掘調査の結果は、11月7日付けで施設課長に文書で通知し、計画通り工事を進めて差し支えない事を申し添えた。

登校道路は平成3年3月12日に完成した。

（桑原）



第1図 調査区周辺地形図

### 第3節 調査の経過（調査日誌抄）

- 10月13日（木） 登校道路建設予定地の北側寄りに、ユニット・ハウスを設置し、表土剥ぎのための、重機（バック・フォーとブルトーザー）を搬入する。南に学校の校舎を望むが、周辺地には刈り取り間近の稲がたわわに実っており、雀威かしのカーバイド発音機が爆発音を響かせる。「学校から、うるさいとの苦情が来ませんか」と農作業の人々に声を掛けると「なあに、学校が後から建ったんだから」声を掛けた大田、妙に納得。
- 10月14日（金） 南北に長い道路予定地の中央箇所に狙いを付けて（庵ノ前遺跡の隣接地）表土剥ぎを行う。
- 10月17日（月） 調査区は予想に反して、表土下は、まったくの無遺物ローム層土で、調査員一同「どうしたことか……」と苦笑。
- 10月18日（火） 午前中までの状態を見て、急遽、調査区を北側へ移す事にする。計画では調査開始から2ヵ月後に予定していた調査区である。但し、現在ここには、ユニット・ハウスが設置されている。
- 10月19日（水） 午後、業者の車が到着。ユニット・ハウスを南側へ移動する。40～50日の調査を考えていただけに、まったく、拍子抜けである。
- 10月20日（木） 重機で北側区域の表土剥ぎを行う。ところが、一部区画については、表土下の黄褐色土層にゴボウ掘削の深穴溝（機械掘り）が掘り込まれている事が判明。「誰だ、試掘の必要無しと判断した者は！何も無いではないかっ！」冗談めいた松舟調査員の叫び声に、一同、爆笑。
- 10月21日（金） ゴボウ掘削の深穴溝の埋土から、まとまった数の縄文土器片が出土。さらに、黄色土層を精査した所、一軒分の住居址を検出。なんとなく、ホッとした雰囲気が現場に流れる。
- 10月24日（月） 北側区域の調査地を1区とし、中央箇所を2区とする。さらに、学校敷地寄りで、段落ち部分の南側区域を3区とする。1区の精査を続ける。
- 10月26日（水） 弥生中期の住居址（一軒分）を掘り上げて、写真撮影と実測を行う。
- 10月27日（木） 1区の北側部分を、Ⅱ層、Ⅲ層と掘り下げるが、縄文の遺物包含層は無かった。31日（月） Ⅳ層のニガシロ層から柱穴を検出。
- 11月1日（火） 3区でトレンチ調査を行うが、厚い表土（約1m）下はローム層土である。
- 11月2日（水） 午前中で調査終了。正味15日間の調査であった。隣接地では、昭和57年に縄文早期の住居址が検出されているだけに、何んとなく残念な気持ちで、現場を引き上げた。

## 第4節 遺跡の位置と地理的環境

### (1) 位 置

熊本県立熊本北高等学校(熊本市清水町榆木)の北側丘陵地に建設された登校道路の一部地域が遺跡である。道路は南側の学校より北側の県道託麻・北部線へ通じるもので、北端部寄りの幅10m、長さ29mの範囲から、Ⅱ層土を切り込む弥生中期の住居址が検出され、同時にⅠ層土を中心にⅢ～Ⅳ層土から、繩文式土器(早期・前期・後期・晚期)や石器が出土した。

国土地理院発行の2万5万分の1地形図「肥後大津」に位置を求むれば、調査区の北端は地形図の左下隅、図幅西から2mm、南から2.7cmの所にある。

### (2) 地理的環境

遺跡の標高は平均して72m強で、この地は熊本市の東部を占める熊本台地(肥後台地)の北側丘陵区域にあたっている。

【熊本台地】 阿蘇外輪山の西側斜面から熊本平野の東部域にかけて、緩やかに広がる台地である。この台地は、西端域において急速に高度を増し、熊本市龍田町上立田から同市清水町万石にかけて標高115m強から151m強の高所を形成しているが、東西方向に走る2本の谷部によって、3つの高所域(丘陵域)に区分される事になる。

【遺跡の所在地】 北側区域の丘陵域は、遺跡の西北西方向の約0.5kmに位置する標高115.7m



第2図 庵ノ前遺跡位置図

の岩倉山が最高所で、これより西方向の清水町兎谷へ緩やかな丘陵地が形成されている。（他の2つの丘陵区域は西端部に最高所があり、地形的にやや異なっている。）遺跡の所在地については、北側丘陵区域の鞍部寄りにあたる所で、登校道路と繋がる県道託麻・北部線は、鞍部の谷部に建設されたものである。

### （3）歴史的環境

【旧石器時代】 榆木遺跡から黒曜石製の細石核が出土している。さらに、天拝山A・B遺跡からもサヌカイト製ポイントの出土を見た。

【縄文時代】 庵ノ前遺跡Ⅱから早期の押型文土器が出土している。さらに、榆木遺跡からは、早期、前期、晩期の土器が出土している。一丁霧遺跡では、晩期の土器が出土している。

【弥生時代】 追ノ上甕棺遺跡からは、人骨の残る那須式の合口甕棺が出土している。庵ノ前遺跡Ⅱからも縄文土器とともに那須式の甕棺片が出土した。同じく榆木遺跡も旧石器～縄文～弥生時代（甕棺）の複合遺跡である。

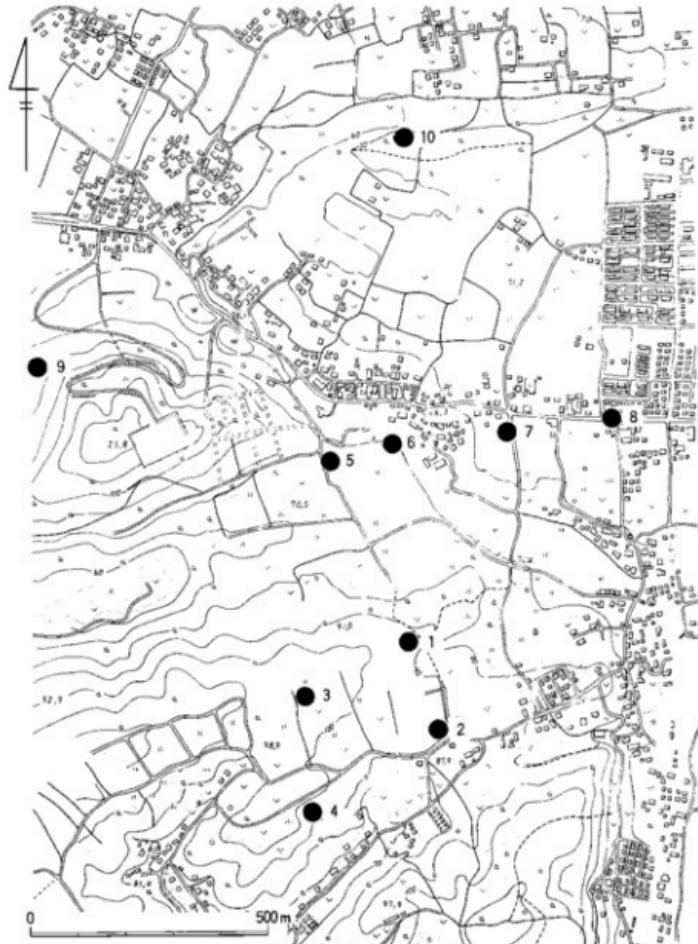
【古墳時代】 堂ノ前遺跡は須恵器の窯跡である。

【参考文献】 平岡勝昭「熊本県発見の無土器文化の一例」『熊本史学 第19-20号』昭和35年

『熊本市北部地区文化財調査報告書』昭和44年



第3図 庵ノ前遺跡周辺地形図



第4図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
1	追ノ上更棺	熊本市龍田町上立田追ノ上	6	庵ノ前遺跡Ⅱ	熊本市清水町榆木庵ノ前
2	追ノ上遺跡	同 上	7	堂ノ前遺跡	熊本市清水町榆木堂ノ前
3	天拝山A遺跡	熊本市清水町榆木天拝山	8	一丁霍遺跡	熊本市清水町榆木楠一丁目
4	天拝山A遺跡	同 上	9	岩倉山中腹遺跡	熊本市清水町兎谷岩倉山
5	庵ノ前遺跡Ⅰ	熊本市清水町榆木庵ノ前	10	榆木遺跡	熊本市清水町榆木堂ノ前

第1表 周辺遺跡一覧表

【参考文献】熊本県文化財調査報告第98集「竜田陣内遺跡」 熊本県教育委員会 1988年

## 第Ⅱ章 調査の成果

### 第1節 層位

遺跡の層序は、熊本平野に普遍的に見られるもので、阿蘇山の火山灰堆積土層である。調査前の土地利用は畑地で、ゴボウなどが植えられていたという。

I層：耕作土層で、平均層厚は40cmである。但し、1区ではゴボウ掘削の深穴溝（機械掘り）がI層土からII層土に掘り込まれており、この溝の埋土から縄文土器片が出土した。溝埋土からの遺物の取り上げについてはI層土からの出土と同じ扱いにした。

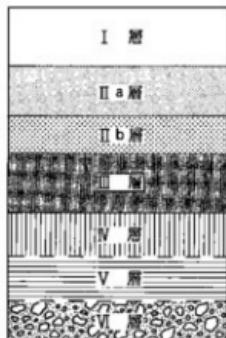
II層：アカホヤ混じりの黄色土層であるが、aとbに細分される。II a層土は平均層厚35cmで、やや褐色めく。検出された弥生中期の住居址は、この土層を切り込むものであった。一方、II b層土は平均層厚25cmで、アカホヤの混入が目立つ黄色土である。

III層：暗褐色土層で、平均層厚40cmを測る。1区の北側区域から検出された柱穴は、本来、この土層を切り込むものである。

IV層：ニガシロ層土である。1区では、この土層で柱穴群を確認した。

V層：ローム層土

VI層：岩盤



第5図 土層位図

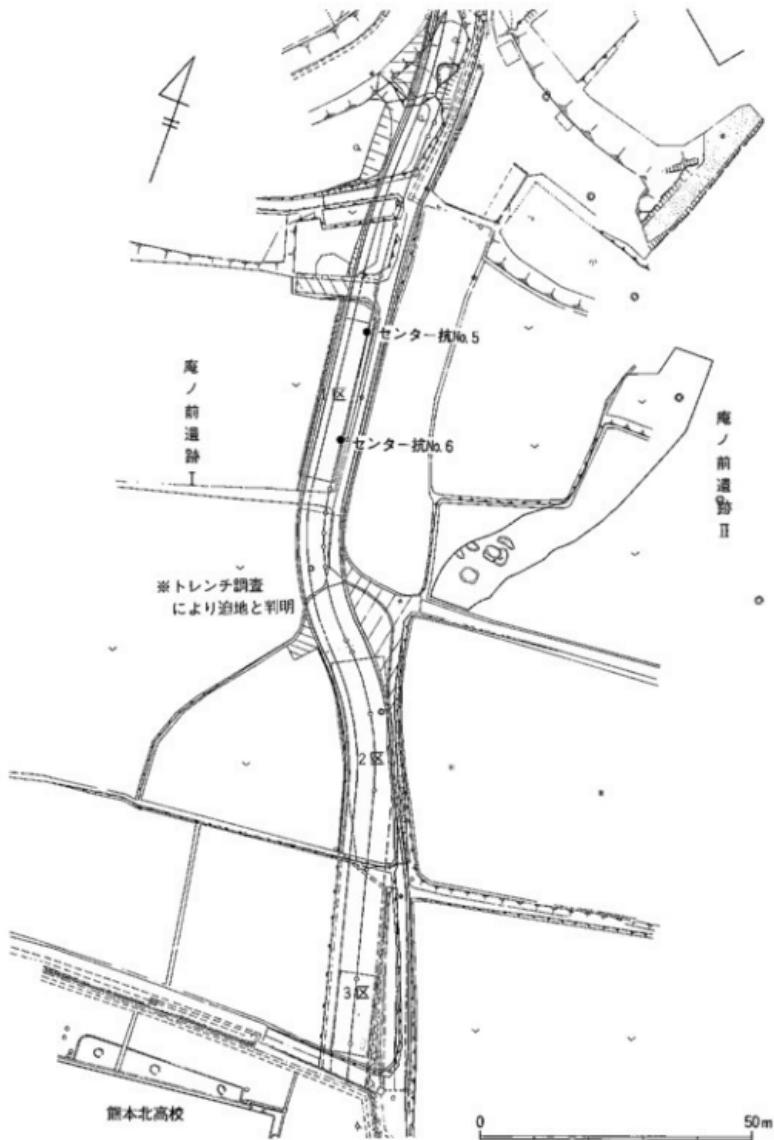
### 第2節 調査区の設定

南側の学校敷地より北側の県道方向へ延びる登校道路敷地の内、幅約10m、長さ133m分が、地形的に見て、発掘可能な地域であった。

道路建設予定地は、農道を拡張し整備する様な工事で形態あり、その走行は南北方向に主軸を有するものの、中途で多少、カーブを描く状態にあった。

地形的には中央部分の長さ38m分が標高73m強で、道路予定地の南北両端より、南側で1.1m、北側で0.5m程高く、丘頂の形状を呈するため、遺跡としての可能性が最も高いという考えのもとに、表土剥ぎを行った。しかし、この区域について、地表下は岩盤とローム層土であり、表土からの遺物の出土もわずかであった（2区）。

そこで、多少傾斜地の中央区域の北側部分（長さ32m）について、数箇所にわたり表土を剥いだ所、バック・フォーで深さ3mに掘削しても地山は検出できず、ほぼ全域が丘陵の小鞍部で



第6図 調査区域図

ある事が判った。さらに、堆積土に遺物も混入していない所から、調査を途中で放棄した。

統いて、これよりさらに北側寄りの長さ29m分について表土を剥いだ所、40点近い縄文式土器と弥生式土器の破片が出土し、Ⅱ層土からは住居址が検出され、この地域については、遺跡であることが事が確認された(1区)。

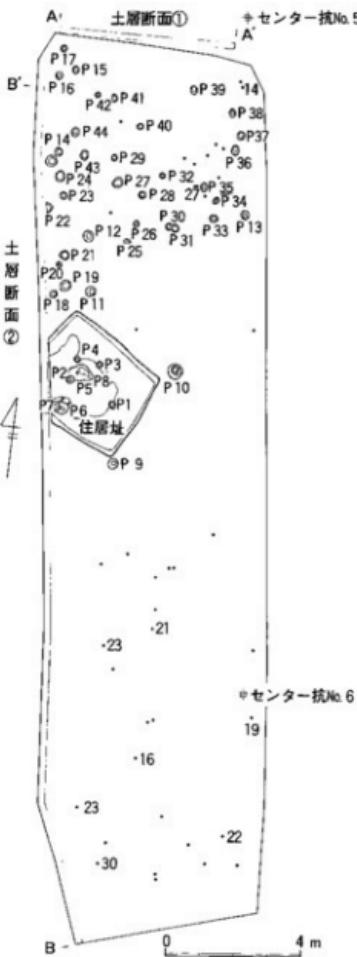
学校寄りの南側の段落ち部分(長さ34m分)は、現地形から見て、地表面が後世に削平されているのではないかとの考えのもとに、全掘を行わず、2ヶ所のトレンチ調査に止めたが、調査結果は予想通りであった(3区)。

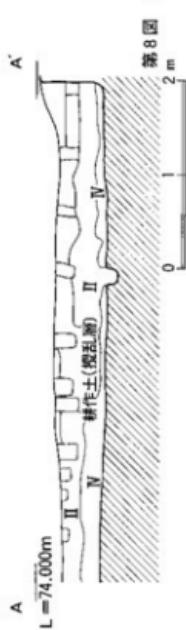
従って、本格的な調査に際し、道路敷地の北側より南側にかけて、順次、1区、2区、3区とした。

### 第3節 1 区

長さ29mの調査区で、道路予定地の北側寄りにあたる。道路センター杭(工事用)のNo.5からNo.6にかかる所で、調査区の北端より50m先は榆木北側丘陵の北縁となる。標高(調査前)はセンター杭No.5で73.28m、No.6付近で73.08mを測る。

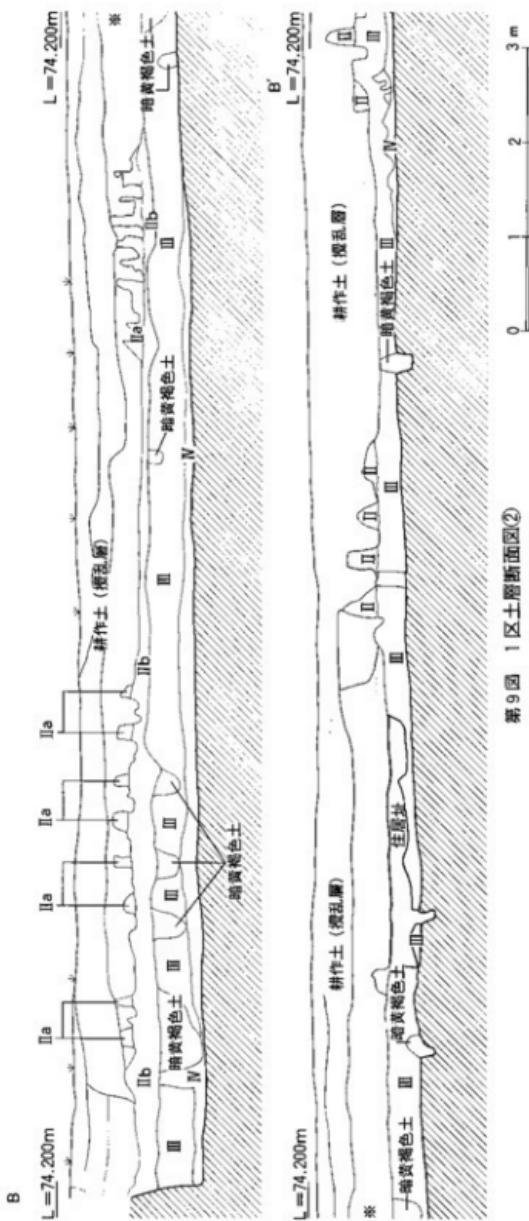
I～Ⅲ層土から縄文土器片・石器・弥生式土器片が出土し、Ⅱ層土からは弥生時代の住居址1基、Ⅱ～Ⅳ層土からは計37個の柱穴が検出された。





II : 黄色土  
 (II a) やや褐色めく。  
 (II b) アカホヤの混入が目立つ。  
 III : 暗褐色土  
 IV : 二ガシロ土

第8回 1区土層断面図①



第9図 1区土層断面図②

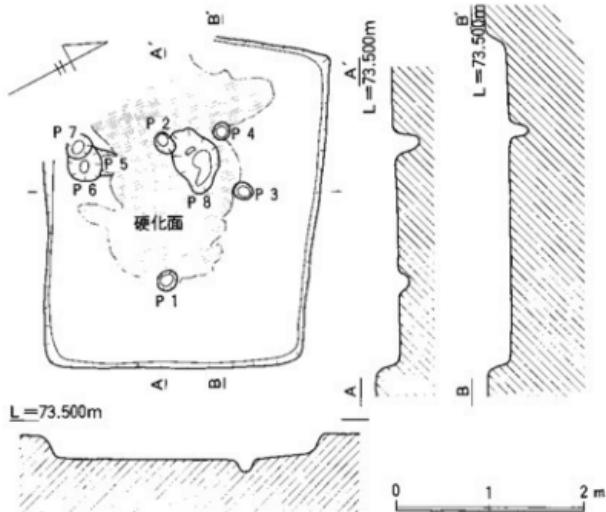
### [1] 住居址

調査1区の北端より南側へ8mの所から検出した竪穴住居址である。住居址の北西隅部分は調査の対象区外へ延びる為に調査が出来なかったが、規模は推定出来た。

住居址の主軸方位はN68°Wで、平面プランは長辺3.5m、短辺2.8~3.0mで、西壁が長く東壁が短い不整長方形プランを呈し、深さは18~28cmを測る。住居址内からは8個のピットが検出されたが、土色観察の結果、内、5個のピットについては埋土が黒色で、中世のものと考えられる。住居址の大きさから、柱は2本柱(P1・P2)で十分であったと思われる。

さらに、住居址の中央からやや北西寄りに、長さ1.23m、最大短径0.5mで、平面形は変形的な長円形のプランを呈する、炉址と思われるピット(主軸方位N72°W、西壁で鋭角状に狹まる)が検出されたが、ピット中に焼土や焼土粒、炭化物などは認められなかった。

しかし、住居址内において、他に炉址と認められる遺構が無い事や、ピットを中心とした硬



第10図 住居址実測図①

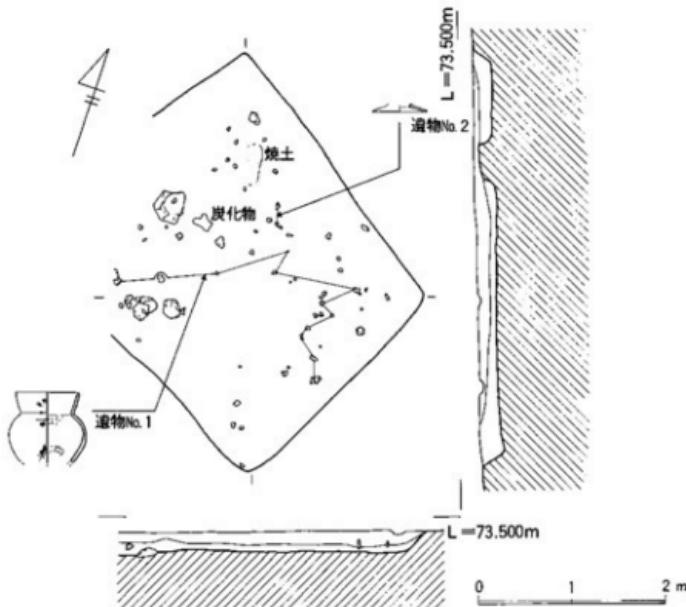
Pit No.	平面形状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土 色	備 考
P 1	楕 円 形	23	21	11	薄 暗	住居址の東側柱。
P 2	楕 円 形	25	19	27	薄暗褐色土	住居址の西側柱。
P 3	楕 円 形	22	17	14	黒色土	Pitの平面形状は北端がやや狭まる。
P 4	円 形	18	—	11.5	黒色土	
P 5	—	(28)	—	7	黒色土	P 6 から切られている。
P 6	* 楕円形	—	(35)	21	黒色土	P 7 から切られている。
P 7	* 楕円形	(30)	—	24	黒色土	
P 8		123	50	18~28	黒色土	

\* は推定 ( ) は遺構検出面での計測値

第3表 住居址内検出のピットの計測表

化面の広がりがある事(ピットを中心とした生活が営まれていた事が判る)から、やはり、遺構の性格として炉址を考えざるを得ない。

住居址から遺物は75点出土しており、その内、51点が床面直上にあった。遺物及び遺構の特徴により、住居址の時期は弥生時代中期と考えられる。



第11図 住居址実測図②(遺物出土状況)

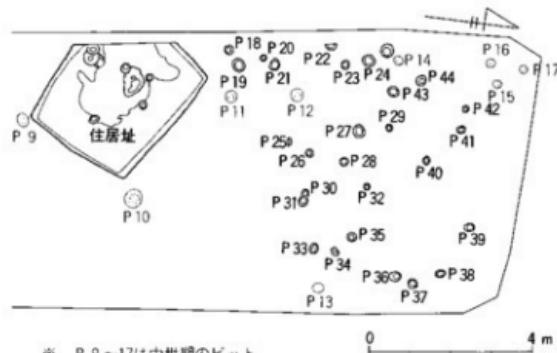
### [2] 柱穴1群

住居址を確認した調査1区のⅡ層土(黄褐色土層)から9個のピットが検出された。遺物は出土しなかったが、埋土はいずれも黒色土で、中世期のものと思われる。

### [3] 柱穴2群

縄文時代調査の為に住居址の北側一帯をⅢ層の暗褐色土層まで掘り下げたが、遺物包含層は存在しなかった。ところが、このⅢ層土を切り込むピットのある事が判明した。しかし、埋土色はⅢ層土と大差なく、土壤の硬度の点でやや軟らかいという程度の差異であった。

そこで、この層での遺構確認をあきらめ、Ⅳ層のニガシロ層まで掘り下げた所、計27個の柱穴を確認する事が出来た。柱穴の時期は住居址の年代である弥生時代の中期を通過する事が確実であるものの、正確な年代や性格について明らかにする事は出来なかった。



第12図 柱穴1・2群実測図

PitNo.	平面形状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
P 9	楕円形	17	14	31.0	床面は東側に片寄る。
P 10	円形	21	—	36.2	埋土は最も軟らかく、柱は立腐れの可能性あり。
P 11	円形	15	—	36.7	床面は南側へやや片寄る。
P 12	円形	15	—	32.5	
P 13	椭円形	15	12	22.2	
P 14	円形	12	—	15.2	
P 15	円形	11	—	20.0	杭跡(?)
P 16	円形	11	—	20.4	杭跡(?)
P 17	円形	10	—	28.9	杭跡(?)

第4表 柱穴1群計測表

PitNo.	平面形状	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
P 18	円形	12	—	17.6	
P 19	楕円形	19	16	25.0	
P 20 (変形)楕円形	10	7	11.5	杭跡(?)。北端で狭まる。	
P 21 (変形)楕円形	15	13	19.7	西端で狭まる。	
P 22	(15)	—	14.5	西側半分は路線外で未掘。	
P 23	円形	11	—	18.8	
P 24	楕円形	18	15	8.4	皿状のビット。
P 25	—	10	—	17.5	南側半分は路線外で未掘。
P 26	楕円形	11	8	12.7	
P 27 (変形)楕円形	17	15	8.5	皿状のビット。形状はP 24に似かよる。	
P 28	円形	11	—	14.7	
P 29	円形	8	—	14.5	
P 30	楕円形	—	8	20.3	P 31と切り合う。前後関係は不明。
P 31	楕円形	—	11	30.2	P 30と切り合う。前後関係は不明。
P 32	円形	9	—	9.6	
P 33	楕円形	13	11	22.3	
P 34 (変形)楕円形	11	8	11.1	北西側の一部が、しゃげた状態。	
P 35	楕円形	14	10	14.1	
P 36	楕円形	16	11	14.1	
P 37	—	13	—	22.1	東側半分は路線外で未掘。
P 38	楕円形	14	9	14.5	
P 39	楕円形	13	10	20.7	
P 40	楕円形	10	8	11.7	
P 41	楕円形	12	8	12.6	
P 42	円形	8	—	9.7	
P 43	楕円形	15	10	19.7	
P 44	円形	13	—	21.5	

( )は遺構検出面での計測値。

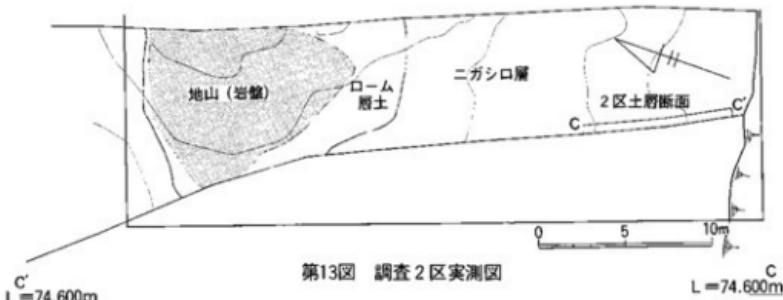
第5表 柱穴2群計測表

## 第4節 2区

長さ38mの調査区で、道路予定地の中央区域にある。センター杭のNo.8からNo.9にかかるところで、標高(調査前)は調査区の南側寄りで75.57mを測る。

表土を剥いだ所、標高75.40~74.35mラインに岩盤が露出した。その範囲は調査区の北端より南側へ幅9m、長さ12mで、周辺からは岩盤を取り巻く様なローム層土も検出された(岩盤より北側へ0.3~1.0m幅、南側へ最大3m幅)。

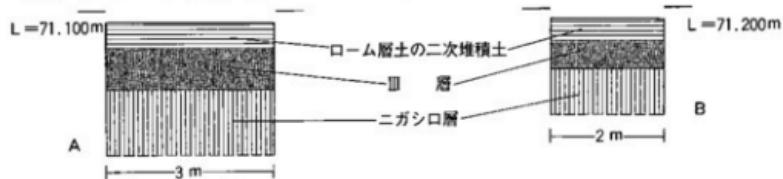
さらに、調査区の中央部分から南側へかけては、全面、ニガシロ土(IV層土)の広がりがみられた。I層土から、縄文土器片が数点出土したのみで、遺構は検出されなかった。



## 第5節 3区

長さ15mの調査区で、道路予定地の南側部分にある。2ヶ所に1m×3m(A)と1m×2m(B)のトレンチを設定したが、断面図に見る様に表土(ロームの二次堆積土)下は、ニガシロ土(IV層土)であった。地表面が後世、削平された結果と思われる。

遺物の出土はなく、遺構も検出されなかった。



第16図 3区トレンチB層位図

## 第Ⅲ章 出土遺物

### (1) 弥生式土器

#### ①住居址内

住居址内からは弥生中期の土器(1～5)が出土している。いずれも、ほぼ、床面密着の状態にあった。

1は小型の甕で、13片の接合により復元口径13.4cm、最大胴部径16.4cmを測る。胎土は緻密で、砂粒、長石、雲母を多く混入し、橙色の色調を呈する。焼成は良好である。

頸部と胴部の境はくの字を呈し、頸部は胴部より急峻な角度(70度)で直線的に立ち上がっていいる。胴部は大きく膨らみ、丸味を帯びた器形となる。器厚は頸部で5mm、頸部と胴部の境で6mm、胴部は最小5mm、最大8.5mmを測る。

調整については、口唇部がナデで、外器面は頸部上位がナデであるのを初めとし、頸部中位から胴部にかけては、斜め方向の刷け目その後、主として横ナデが施されている。胴部の中位から下位は不定方向のナデが加えられ、平滑な器面に仕上げられている。一方、内器面は頸部が横ナデで、胴部上位から中位にかけては、指頭圧痕が顕著に残り、不定方向のやや丁寧なナデも加わった状態にある。胴部中位から下位は、やや粗いヘラ削り後、粗い横ナデが施されている。胴部下位は非常に粗い調整で、指頭圧痕が残っている。

2は高壺の脚部で、3片の接合により復元底径12.2cmを測る。胎土はやや緻密で、砂粒、長石、白色鉱物を少量混入し、外器面は淡橙色、内器面は灰黒色の色調を呈する。焼成は良好である。脚部は大きく開いた状態(傾斜角度20度)にあり、上位から下位にかけて漸次、先細りとなる。器厚は脚部の上位で6mm、下位で3mmを測る。

調整については内外器面ともロクロ回転を利用した横ナデで、外器面の下位には、さらに斜め方向の刷け目後、ナデも加わっている。

3は甕の脚部で底径6.4cmを測る。胎土は緻密であるが、やや軟質で、砂粒、雲母などの鉱物を多く混入し、稀に粗大な砂粒も見られる。色調は内外器面とも淡橙色～茶褐色で焼成は良好である。

脚台は全体的にずん崩の感じがする。甕本体の立ち上がりの傾斜角度は50度で、脚台は45度の角度で外側へ開く。器厚は底部中央が2.3cmで、甕本体の残存体部は上位で1.1cm、下位で8mmを測る。

調整については、外器面が縱方向の刷け目で、脚台の突端部にはロクロ回転利用の横ナデが施されている。外底面は主として横ナデで、内、底面は不定方向のナデとなる。

4は甕(?)の口縁部である。胎土は密で、砂粒、長石などの鉱物を含み、稀に直径2mm大の

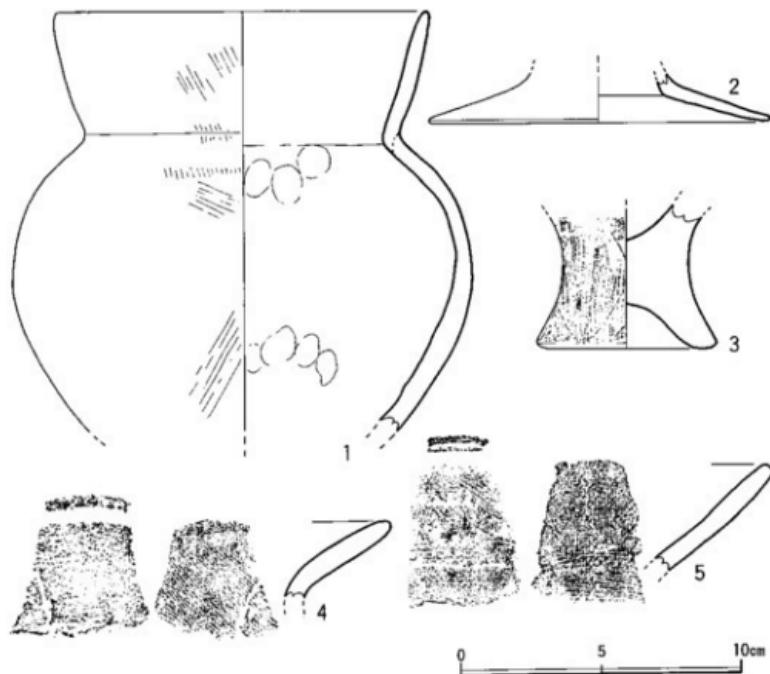
礫を少量混入する。色調は、外器面が黒色で、内器面は淡橙色を呈する。焼成は良好である。口縁部は大きく外弯し、口唇部はやや丸味を帯びる。器厚は(残存)、口縁部の下位で7mm、中位で8mm、上位で6mmを測る。

調整については、外器面が横ナデで、内器面には斜め方向の細かい刷け目が施されている。

5は壺の口縁部である。胎土は緻密であるが軟質で、砂粒、長石などをわずかに混入し、外器面は黒色、内器面は淡橙色の色調を呈する。焼成は良好である。

口縁部は、直線的に伸びるもの、やや内弯気味の傾向にある。器厚は下位で6.5mm、上位で5.5mmを測る。

調整については、口唇部が丁寧な横ナデで、外器面上位から中位が横ナデ後、斜めのナデで、中位から下位は横方向の刷け目後、横ナデが施されている。一方、内器面は横ナデで、下位には、さらに横方向の刷け目が加えられている。



第17図 出土遺物実測図(1)

## ②その他

第Ⅰ層土から、細片を含め計13点の弥生式土器が出土した。この内7点を図示したが、6～9は中期のもので、10は晩期である。

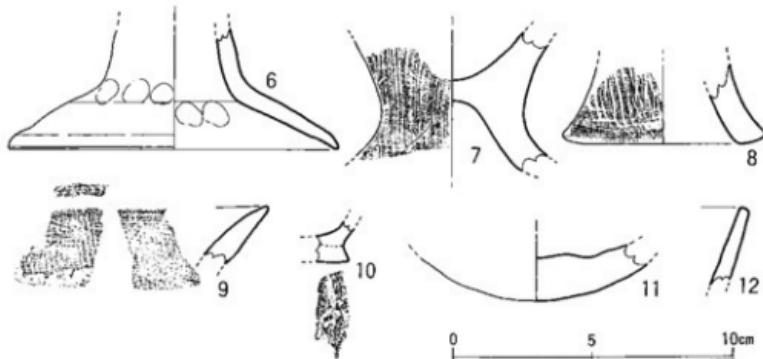
6は高壺の脚底部片で、4片の接合により復元底径11.8cmを測る。胎土は緻密であるが、やや軟質で、砂粒、長石、雲母をわずかに混入する。色調は淡橙色で、焼成は良好である。

脚部は大きく開き(傾斜角度25度)、器厚は上位から端部にかけて漸次、薄壁となる(上位で6mm、屈曲箇所で7mm、端部で3mm)。調整については、回転を利用したナデが施されている。さらに、両器面とも中位部分にかすかな指頭圧痕を残す。

7は壺の脚台片である。胎土は密で、砂粒、雲母、石英を多く混入し、外器面が橙色で、内定面は黒色の色調を呈する。焼成は良好である。壺の体部は、器厚1cmを測るが、底部は薄壁(7mm)である。脚台は下位で1cmの器厚となる。壺と脚部の接合痕は不明確である。調整については、外器面が縱方向の細かな刷け目で、内底面には丁寧なナデが施されている。一方、外底面は横方向の細かい刷け目(回転利用)となっている。

8は脚部の底部片で、復元底径7.2cmを測る。胎土は非常に緻密であるが、やや軟質の傾向にある。鉱物の混入は極く少量で、直径3mmの大の小砾がやや目立つ程度である。色調は外器面が淡茶褐色で、内器面は淡橙色である。焼成は良好である。脚台の器厚は、均一の厚さ(1cm)で、端部に至る。端部は、やや丸味を帯びた状態にある。調整については、外器面が縱もしくは斜め方向の刷け目で、内器面と端部は回転を利用した横ナデが施されている。

9は口縁部片である。胎土は密で砂粒、長石を比較的多く混入し、外器面は淡灰褐色、内器面は淡橙色の色調を呈する。焼成は良好である。口縁部は直口で、外器面が直線状であるのに対し、内器面は凸面状をなす。調整については、口唇部から外器面にかけて、縱方向の刷け目



第18図 出土遺物実測図(2)

後、横、および斜め方向の刷け目が加えられており、内器面は斜め方向の刷け目後、横ナデとなる。

10は底部片である。胎土は密であるが、軟質で、少量の砂粒を混入する。色調は淡褐色で、焼成はやや甘い。底部は肥厚し(1cm)、外底端は角張る。体部の器厚は4.5mmを測る。調整については、外器面と内器面が回転利用のナデで、外底面はナデとなる。

11は甕の底部である。胎土は緻密で、極微細な砂粒鉱物を混入し、外器面は淡茶褐色、内器面は淡橙白色の色調を呈する。底部は丸底で、器厚は底部の中央で1.6cmを測る。調整については、内器面に指頭圧痕が顕著に残る。

12は口縁部片である。胎土は密であるが、やや軟質で、砂粒(中に粗大な物がある)や鉱物を混入する。色調は内外器面とも淡橙褐色を呈する。焼成は良好である。調整については、外器面の上位から中位にかけて回転利用のナデで、中位から下位は斜め刷け目後、回転利用の横ナデである。一方、内器面は上位から中位が横方向のヘラ削りで、中位から下位は斜め方向のヘラ削りとなる。

## (2) 繩文式土器

I層土から27点、II層土から12点、III層土から4点、計43点の縄文土器片が出土した。この内、21点を図示したが、早期のもの(13~21)、前期のもの(22~23)、晚期のもの(31~33)とがある。

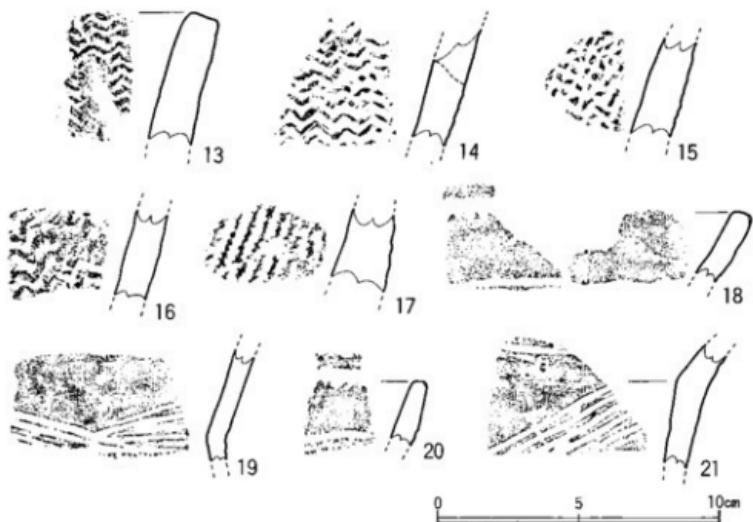
① (13~16) 早期の土器で、外器面に山形押型文が見られる。この内、15には山形押型文が重ねて施されている。16は小さい山形押型文である。

13は口縁部片で、I層土からの出土である。胎土は密で、砂粒、長石、石英を多く混入し、稀に粗大な砂粒も見られる。色調は外器面が淡橙色で、内器面は淡褐色である。焼成はやや甘い。器厚は上位で1.1cm、下位で1.5cmを測る。口唇部から内器面には、丁寧なナデが施されている。

14は胴部片で、III層土からの出土である。胎土は密で、砂粒、鉱物を混入する。色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。器厚は1.1~1.3cmを測る。内器面にはナデが施されているが、指頭圧痕も認められる。

15は胴部片で、住居址の埋土から出土した。胎土は粗で、砂粒、長石、雲母を多く混入する。色調は淡褐色で、焼成はやや甘い。器厚は1.2~1.4cmを測る。内器面には丁寧なナデが施されている。

16は胴部片で、I層土からの出土である。胎土はやや粗で、砂粒、長石、雲母をかなり多く混入する。色調は外器面が淡赤褐色で、内器面は淡黄褐色である。焼成はやや甘い。内器面には丁寧なナデが施されている。



第19図 出土遺物実測図(3)

② (17) 早期の土器で、外器面に縄文が見られる。胴部片で、I層土からの出土である。胎土は密で、直径2~3mmの粗大な砂粒を多く混入する。色調は淡橙色で、焼成はやや甘い。内器面にはナデが施されている。

③ (18~21) 塞ノ神系の早期土器で、外器面に凹線文が見られる。

18は口縁部片で、I層土からの出土である。胎土は緻密で、長石、雲母を多く混入する。色調は橙色で、焼成は良好である。器厚は均一で8mmを測る。内外器面は丁寧なナデであるが、外器面については、口唇部の直下にヘラ状工具による刻み(1mm幅)があり、下位には横位の凹線(3mm幅)が巡る。

19は頸部片(?)であろう。II層土からの出土である。胎土はやや粗で、多孔質であり、砂粒、長石、石英をかなり多く混入する。色調は淡赤褐色で、焼成はやや甘い。頸部はくの字の形状を呈し、器厚は均一(7mm)である。内外器面は主として横ナデであるが、外器面に斜行の凹線(3mm幅)が交差する。

20は口縁部片で、I層土からの出土である。胎土は緻密で、長石をわずかに混入する。色調は鈍い橙色で、焼成は良好である。口縁部は内器面側は凸面状を呈する。器厚は上位で5mm、中位で8.5mmを測る。

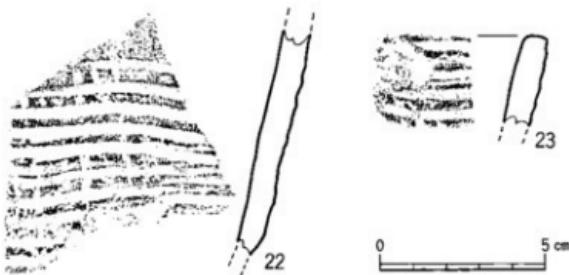
調整については18と同じで、内外器面は丁寧なナデであるが、外器面については、口唇部の直下にヘラ状工具による刻み(1mm幅)がある外、下位には横位の凹線(3mm幅)が巡る。

21は4片接合の頸部片で、I層土からの出土である。胎土は密で、砂粒、長石、雲母をわずかに混入する。色調は淡橙色で、焼成は良好である。器厚は上位で8mm、中位の屈曲部で1.2cm、下位で8mmを測る。内外器面とも非常に丁寧な横ナデであるが、外器面には上位に横位の凹線、下位に斜め方向の凹線を施す。凹線は、いずれも2mm幅である。

④(22~23) 薩系の前期の土器で、外器面に貝殻条痕文(3~4mm幅)が見られる。

22は胴部で、II層土からの出土である。胎土は粗で、多孔質であるが、砂粒、白色鉱物、黒色鉱物を多く含み、稀に直径2~3mm大の礫も混じる。器厚は上位で9mm、中位で8mm、下位で6mmを測る。色調は淡茶灰色で、焼成は不良である。調整については内外器面ともナデと思われるが、器面がローリングを受けている。

23は口縁部片で、III層土からの出土である。胎土はやや粗で、砂粒、長石を多く混入する。色調は淡黄褐色(一部、黒色)で、焼成は不良である。器厚は均一で8mmを測る。調整については内外器面ともナデと思われる。ローリングが激しい。



第20図 出土遺物実測図(4)

⑤(24~30) 三万田系の後期の土器である。精製土器で、28を除き内外器面に横方向の研磨が見える。(28のみ、内器面の調整は単なる横ナデに終わり、研磨されていない。)

24は胴部片で、I層土からの出土である。胎土は密で、やや軟質であるが、砂粒、長石を多く混入する。色調は淡茶褐色で焼成はやや甘い。器厚は上位で6mm、中位の屈曲部で8.5mm、下位で7mmを測る。外器面の研磨はやや粗い。

25は口縁部でI層土からの出土である。胎土は密で、砂粒、長石を多く混入する。色調は茶褐色(一部は灰色)で焼成は良好である。口縁部は内器面が凹面の状態にあり、外器面は上位に1cm幅で非常に強いナデが加わり、押し潰されたような形状を呈する。結果的には口縁直口となっている。器厚は9mmを測る。

26は小型鉢か深鉢の口縁部で、住居址の埋土からの出土である。胎土は緻密で、極わずかに微細な砂粒、長石が混入する。色調は淡茶褐色で焼成は良好である。口縁部は薄壁で均一の厚さ(4mm)であるが、内傾気味に弯曲する。内外器面には、1~2mm幅のヘラ状工具による横方

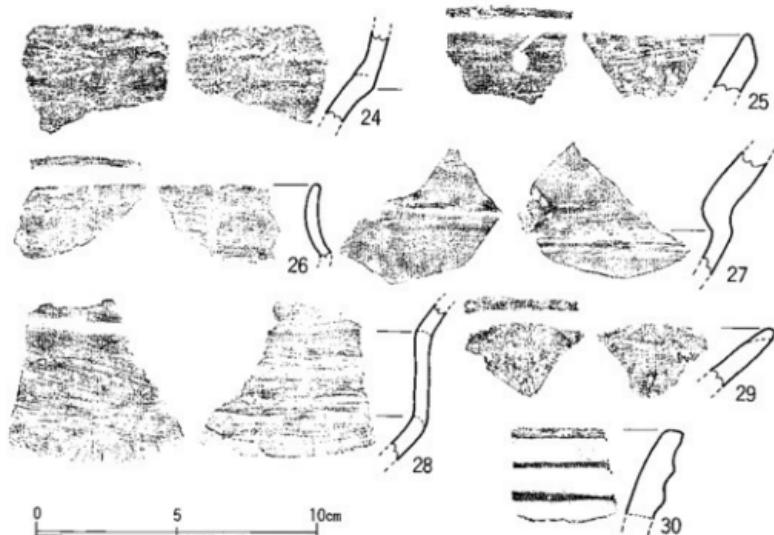
向の丁寧な研磨が施されている。

27は鉢(?)の頸部から胴部にかけての残存で、I層土からの出土である。胎土は緻密で、混入物はほとんど無い。色調は外器面が淡黄褐色で、内器面は黒褐色を呈する。焼成は良好な状態にある。器厚は頸部で1cm、胴部で5mmを測る。内外器面とも極めて丁寧な横方向の研磨が施されている。

28は鉢か深鉢の頸部から胴部にかけての残存で、I層土からの出土である。胎土は密で、砂粒、長石、雲母をやや多く含む。色調は外器面が淡橙色で、内器面が淡灰褐色である。焼成は良好である。器厚はほぼ均一で、上位と中位で5mm、下位で6mmを測る。内器面の横方向の研磨は外器面に比べて粗い。

29は波状口縁を有する土器片で、I層土からの出土である。胎土は密で、砂粒を多く混入している。色調は淡茶褐色で、焼成は良好である。器厚は均一で7mmを測り、内外器面に不定方向の研磨が見える。

30は口縁部片で、II層土からの出土である。胎土はやや粗で、砂粒、長石、石英を多く混入する。色調は淡黄褐色と灰黄褐色で、焼成は良好である。器厚は上位で7mm、下位で1cmを測る。外器面に1cmの押線文が施されており、内器面には横方向の研磨が残る。



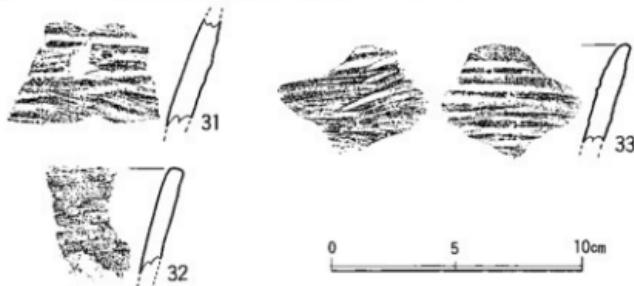
第21図 出土遺物実測図(5)

⑥ (31～33) 晩期の粗製土器である。

31はⅠ層土からの出土である。胎土は緻密で、極くわずかに砂粒を混入する。色調は外器面が鈍い茶褐色で、内器面が灰褐色である。焼成は良好である。器厚は上位で7mm、下位で9mmを測る。調整については、外器面に横方向の条痕があり、内器面には横方向の研磨が施されている。

32は口縁部片で、Ⅰ層土からの出土である。胎土は緻密で、砂粒、長石を多く混入する。色調は鈍い茶灰色で、焼成は良好である。器厚は均一で7mmを測る。調整については、口唇部がナデで、外器面は非常に粗い横ナデとなっている。内器面には回転利用のナデが施されている。

33は深鉢の口縁部である。胎土は緻密で、わずかに砂粒を混入する。色調は外器面が赤褐色で、内器面が茶褐色を呈する。焼成は良好である。器厚は上位で5mm、中位と下位で8mmを測る。調整については、内外器面に横方向の条痕(3～4mm幅)が見える。



第22図 出土遺物実測図(6)

### (3) 石 器

① (34・35) 打製石斧である。34はⅢ層土、35は弥生式住居址の埋土からの出土である。いずれも、縄文晩期の石器である。

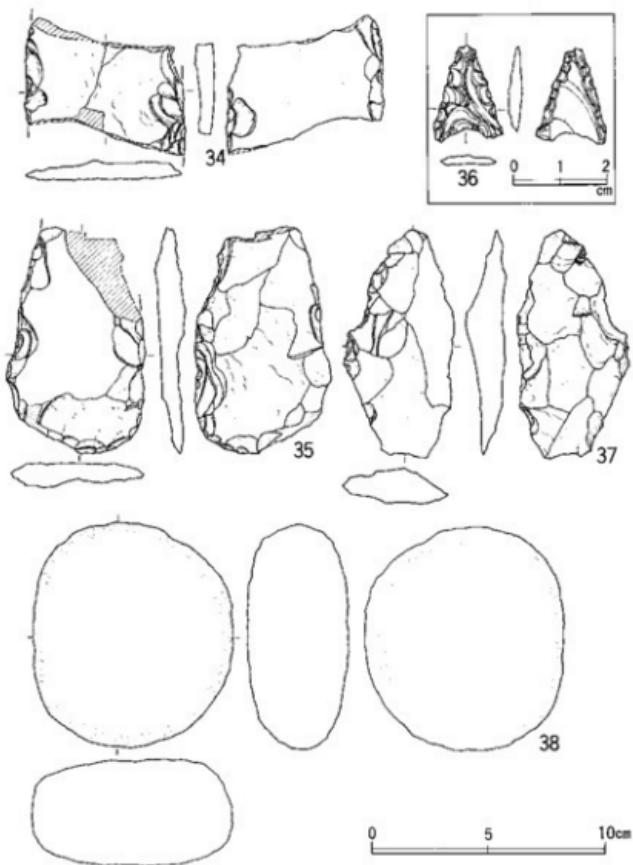
34は基部と先端部を欠損しているが、形状的には短冊形を呈するものと思われる。

35は基部を欠損する。刃部は片面が突っ張った状態にある。

② (36) 石鎌でⅢ層土からの出土である。黒曜石製で、二等辺三角形の形状を呈し、基部に浅い凹みがあり、裏面には剥片面が見られる。

③ (37) 二次加工石器で、Ⅰ層土からの出土である。安山岩製で、一側面に両面からの大きな剥離があり、他面には自然面を残している。ポイント等の未加工品と思われる。

④ (38) 磨石で、Ⅰ層土からの出土である。風化が激しいが、側辺部のコウダ痕は平坦になるまでよく使用されている。研磨面の痕跡は風化のため確認できないが、表裏両面とも同じ様な丸味を持っている事から、研磨用に使用されたものと思われる。



第23図 出土遺物実測図(7)

No.	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
34	打製石斧	4.6	6.9	0.85	41.8	砂岩	欠損
35	打製石斧	9.7	6.0	1.2	85.3	砂岩	欠損
36	石鎌	2.1	1.5	0.3	0.65	黒曜石	
37	二次加工品	9.5	4.7	1.5	57.9	安山岩	未加工品
38	磨石	9.6	8.5	4.4	511.3	砂岩	

第6表 石器計測表

## 第Ⅳ章 まとめ

(1) 昭和57年度の調査では、押型文土器(山形文・梅円文・格子目文)、斜行縄文土器を主体とする縄文早期の住居址が検出されており、昭和63年度の発掘調査でも調査区が隣接している所から、これに似かよった調査結果が期待された。しかし、予想は大きく外れ、弥生時代中期の住居址を一軒検出したのみに止まった事は、本報告書で述べた通りである。一方、縄文式土器については、確たる包含層は存在せず、主に表土からの出土で、Ⅱ層とⅢ層からの出土は僅かであったが、総じて、土器自体は、早期・前期・後期・晩期に分類可能であった。この事は元来、庵ノ前遺跡が昭和57年度の調査結果と同様に、縄文時代を中心とした遺跡である事を示す結果となった。

(2) 今回の調査区の中心部分は、いわゆる榆木北側丘陵ラインに該当する部分で、調査結果からしても、後世において、耕作のために大方が土層の上面を完全に削平された箇所である事が明白である。

今回、住居址が検出された区域は、削平を受けた丘頂ラインの北側にあり、狭義的には小さな迫地(調査により存在を確認)を挟んだ、やや低地部分である。そのために丘頂ラインとは異なり、やや不完全な削平になったものと思われる。

(3) 学校敷地の北側に広がる榆木丘陵は、丘頂ラインを除いた、やや低地部分に縄文～弥生時代の遺物包含層や遺構が残っている事が考えられる。今日、この地域は、まだ畠地や水田地帯であるが、宅地化の波は目前に迫っており、開発は必至と思われる。今後の文化財行政の対応には十分な注意を払う必要があろう。

# 庵ノ前遺跡Ⅱ



# 庵ノ前遺跡

「日本考古学年報 35」1982年度版 日本考古学協会

緒方 勉

## 1. 調査の経緯及び遺跡の位置環境

熊本県教育委員会は、熊本市の北東部に高校を新設計画した。計画地は立田山の後背地の、岩倉山(125.8m)と天拝山(130.8m)の山麓部で谷頭にあたっている。そこで、県文化課は現地を踏査し、学校建設地の取付け道路に「庵ノ前遺跡」があることを確認した。調査は工事着工に先立ち、昭和57年5月から7月にかけて文化課参事 緒方 勉、同技師 木崎康弘が担当して発掘調査を実施した。

庵ノ前遺跡は熊本市清水町大字榆ノ木字庵ノ前にあるが、遺跡の範囲は隣接地の龍田町上立田字古閑山にもひろがっている。

今次の調査は古閑山地区の約500m<sup>2</sup>を発掘した。

遺跡は岩倉山の山麓尾根先にゆるく延びる標高70mの平坦な火山灰台地で、これまで弥生時代の甕棺のほか、縄文土器(押型文御領式・組織痕土器)が出土している。周辺には榆ノ木、天拝山A・B、緑ヶ丘などの縄文～弥生期にわたる各遺跡がある。

## 2. 土層層序

第Ⅰ層は耕作土で、畑地の耕起による擾乱土である。

第Ⅱ層は黒色土層で、ほとんどが削平され、部分的にしか残存していない。層中に弥生式土器を包含していた。

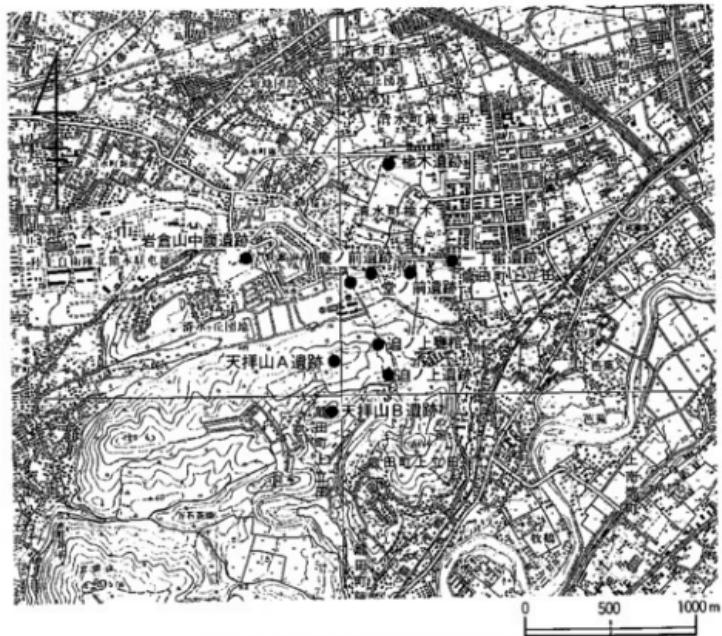
第Ⅲ層は褐色土層で、しまりのない、サラサラした状態を呈する。色調はアカホヤを含むためか、やや明るい。縄文時代前期・晩期の土器を発見した。

第Ⅳ層は暗褐色土層で、第Ⅲ層とほとんど変わりないが、色調がかなり暗くなる。しかし、第Ⅲ層との間の界面は不明瞭である。第Ⅲ層下面より第Ⅳ層上面には押型文土器・幕A式土器・斜行縄文土器が出土した。

第Ⅴ層は硬化黒色土層(ゴリゴリ・ニガシロ)で、層そのものが塊状に硬化したもので、縦にクラックの入る特徴を持っている。層中からの遺物の出土はない。

第Ⅵ層は明褐色ローム層土で、いわゆる「ハードローム」と称されるものに類似し、硬くしまった土層である。中にあずき粒大の軽石を少量含んでいる。

第Ⅶ層は明褐色ローム質土層で、上層に対し、粒子がやや粗く、色調がいく分淡くなる。



第24図 鷹ノ前遺跡の位置と周辺遺跡

### 3. 遺構

#### (1) 壁穴住居

縄文時代早期に属すると考えられる壁穴住居址を4基検出した。このうち、1~3号住居址は切り合っている。

##### 1号住居址

最大長2.74m、最大幅1.9mを測る胴張りのある小判形を呈する住居址である。壁高は25cm、最も深いところで30cmの皿形を呈している。底面は部分的にロームの貼り床がみられ、かなり、しっかりとした床の状態を示していた。しかし、貼り床がみられない部分は、ニガシロが床面を成している。炉などの施設は認められない。

##### 2号住居址

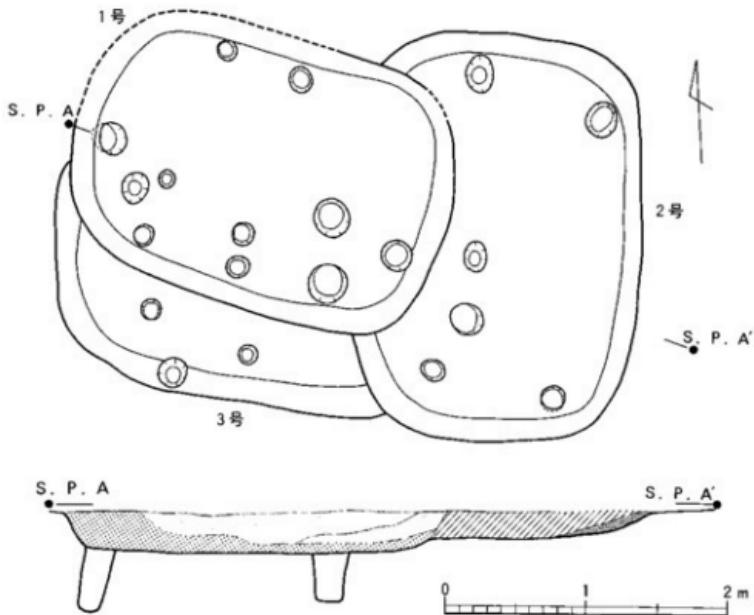
最大長2.85m、最大幅2.10m(推定)を測る胴張りのある小判形を呈する住居址である。壁高16cm、最大深20cmの皿形を呈している。床面には1号住居址と同様、部分的なローム貼り床が認められ、それ以外の部分にはニガシロがある。床の状態はかなり良好である。炉は認められない。

### 3号住居址

最大長3.17m(推定)、最大幅2.54m(推定)を測る胴張りのある小判形を呈する住居址である。壁高13cmの皿形を呈するものと見られる。残置された床は、ニガシロによってなされ、良好な状態ではない。また、炉の存在は不明であるが、本遺跡の他の住居址からすれば、なかったと考えることが妥当であろう。

### 4号住居址

最大長3.24m、最大幅2.54m、最大深18cmを測る不整形の住居址である。床面はすべてニガシロであり状態は良好ではない。この住居址にも炉は認められなかった。



第25図 積穴住居址（1～3号）

### (2) 磯群

これら積穴住居址の他、縄文時代早期に属するものと考えられるものに磯群がある。磯群は、発掘区のはば全域にわたって認められるが、概観すれば、大きく2つのまとまりに分離することができた。すなわち北にひとつの集中部、南にもうひとつの集中部である。また、これらの集中の傾向に対応して、土器・石器の分布がみられた。

### (3) 土 壤

上記の遺構の他に、3基の土壤がある。いずれも長楕円形の形状を示し、土層の堆積状況で最上層にアカホヤガラスを多量に含む明褐色の土層をのせる点で共通している。

#### 1号土壤

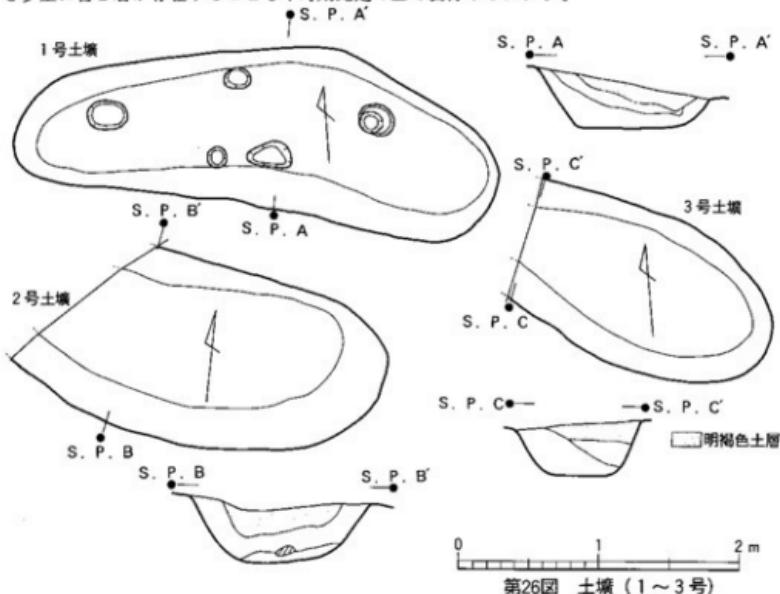
長径3.46m、短径1.17mを測り、最大壁高38cmの土壤である。床にはロームの貼床があり、浅い掘り込みが5個認められ、住居址状の遺構と考えてもよからうか。また貼床中より押型文土器・斜行縄文土器・条痕文土器・無文土器が出土した。

#### 2号土壤

長径約3.5m(推定)、短径1.3m(推定)、壁高40cm、最大深44cmを測る土壤である。土壤堆積土層の第Ⅱ層下面及び床直上より斜行縄文土器3点が出土している。

#### 3号土壤

長径約2.65m、短径約1.1m、壁高38cm、最大深42cmを測る土壤である。出土遺物はない。以上3基の土壤は、いずれも堆積状況が近似している点から、時期的に近いものと考えられる。さらに、1号土壤の貼床中より押型文土器・斜行縄文土器・無文土器・藤A式土器と貝殻条痕文土器が出土し、2号土壤中より斜行縄文土器が出土していることから、縄文時代早期後葉～前期前半に比定することが可能となろう。このことは、土壤埋積最上層にアカホヤガラスを多量に含む層が存在することも、時期比定の上で裏付けられよう。



第26図 土壇（1～3号）

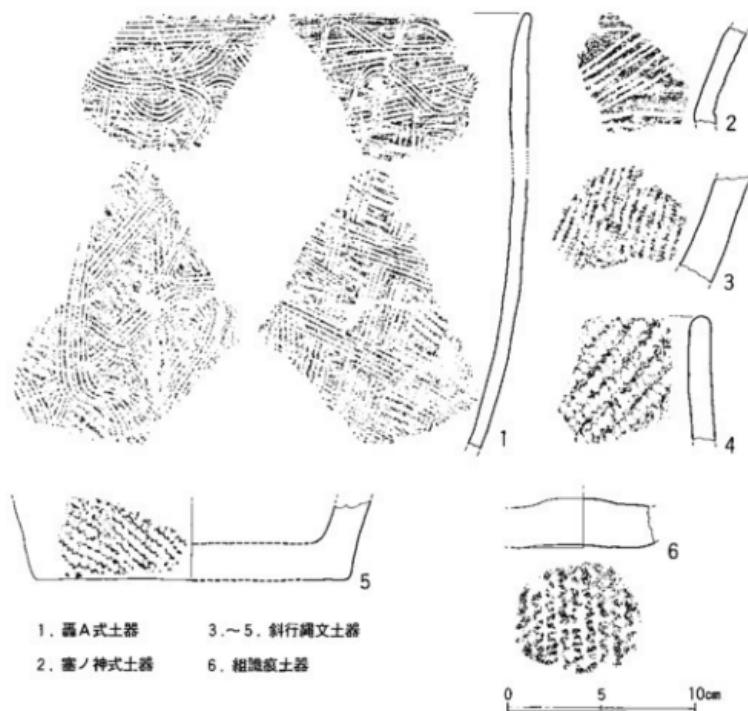
#### 4. 出土遺物

本遺跡第Ⅲ層下面～第Ⅳ層上面出土遺物について、土器・石器別に略述したい。

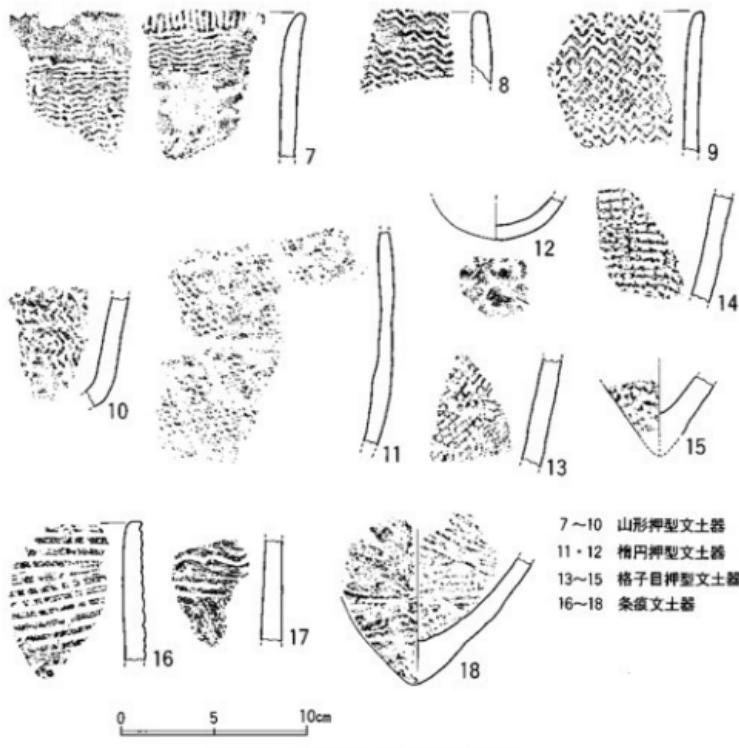
土器は、押型文土器(山形文・楕円文・格子目文)及び斜行縄文土器が大部分を占め、無文土器・塞ノ神式土器・籌A式土器がみられた。押型文土器の主体をなすものは、山形文・楕円文である。器厚は、約2cmを測る厚手のものから薄手のものまでみられる。底部の形状は、尖底・平底の両様があった。また組織痕をもつ平底も出土した。

石器は、磨石・石皿・石鏃・くさび形石器・二次加工のある不定形石器が出土した。中でも、磨石は、石器全体の90%以上を占めている。

圧倒的量の磨石には、火熱を受けているものも見られ、中には、礫群の一部をなしているものがある。石鏃には、鍔形鏃・剥片鏃(表採)があり、本遺跡は量的に少ないと云え、長崎県岩下洞の様相に近似している。



第27図 Ⅲ層下面及びⅣ層出土土器(1)



第28図 III層下面及びIV層出土土器(2)

## 5. 麻ノ前遺跡調査のまとめ

高校誘致(熊本北高校)に伴い、その取付道路の約160m<sup>2</sup>の範囲にわたって発掘調査を実施した。この道路と学校敷地との間は、土地買上げが不調に終わり、調査を中断した。

この時の調査で注目されるのは、縄文早期の造構の検出である。調査した範囲から4基の竪穴住居址、3基の土壙、礫群(集石)があり、とくにこれまで火山灰台地では、検出困難とされていた竪穴住居址の発見は、この地域での今後の調査を方向づけるものとなろう。遺跡の状況から、尖底土器だけ取り上げて古い様式の土器と見るのも困難である。縄文前期様式と見られていた塞ノ神式土器も、層序のうえで各地で押型文土器との共伴出土することが知られるに至り、既成の様式概念のみで処理するのは危険である。これらの問題はさらに、遺物の整理検討の上、充分時間をかけて考究さるべき課題もある。

# 熊本県庵ノ前遺跡について

日・豊・肥 古文化研究会 資料2 繩文時代の生活遺跡

長湯シンポジウム実行委員会 1982.11

木崎 康弘

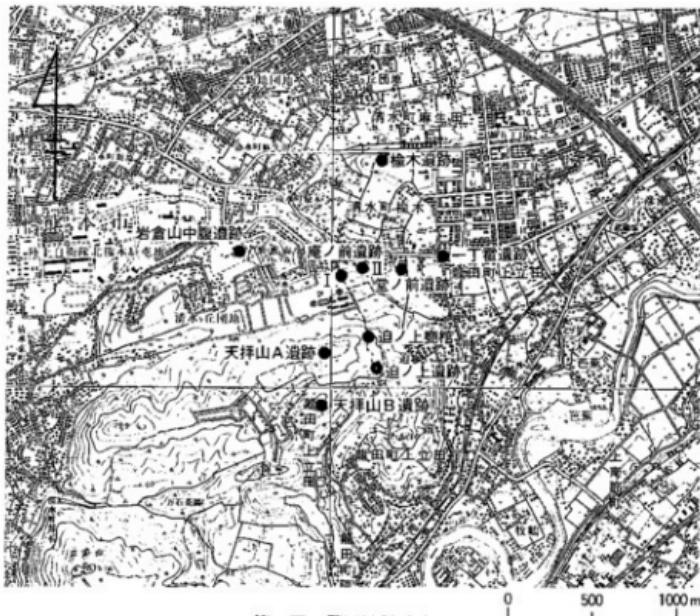
熊本県熊本市龍田町古閑山

## 1. 遺跡について

庵ノ前遺跡は、熊本市の北東隅、白川流域に位置し、白川及び坪井川の開析の結果、残された標高70mの台地(低位段丘)上にある。また、本台地の基底を阿蘇溶結凝灰岩(阿蘇4火砕流)がなし、その上層に、阿蘇4風化層、洪積世堆積層、沖積世堆積層をのせる。

遺跡は、岩倉山と天押山・立田山による谷部にある。そしてその谷は、さらに2段の小段丘によって構成され、遺跡は、その南向段丘最上部に位置する。

調査は、熊本県教育庁文化課によって5月から7月12日にかけて実施され、良好な押型文土器を出土する遺跡の検出に成功した。



第29図 周辺遺跡分布図

## 2. 基本層準について

第Ⅰ層：耕作土

第Ⅱ層：黒色土層

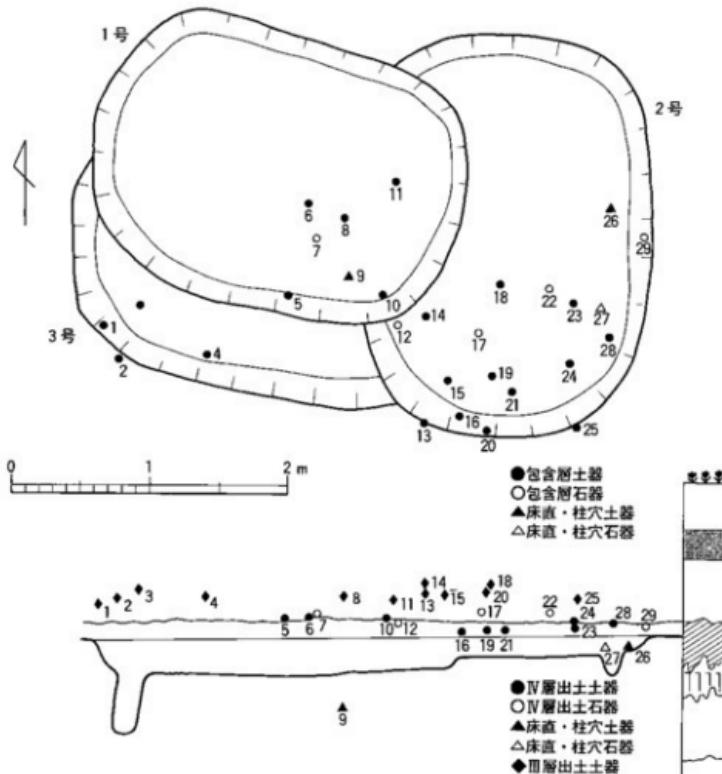
本層は、ほとんどが削平され、部分的にしか残存していない。弥生式土器が見られた。

第Ⅲ層：褐色土層

本層は、しまりのない、サラサラした状態を呈する。色調は、アカホヤを含むためか、やや、明るい。縄文時代前期・晚期の土器が見られた。

第Ⅳ層：暗褐色土層

本層の状態は、第Ⅲ層とほとんど変わりないが、色調の上でかなり暗くなる。唯、第Ⅲ層との線引きは不明確である。第Ⅲ層下面より第Ⅳ層上面に押型文土器、轟A式土器、斜行縄文土



第30図 窪穴住居址部分遺物垂直分布図・層位略図

器が出土した。

#### 第V層：硬化黒色土層(通称ニガシロ)

本層は、層そのものが塊状に硬化したもので、中に長石・石英・火山ガラス等を多量に含む。

#### 第VI層：明褐色ローム質土層

所謂「ハードローム」と称されるものに類似し、かなり硬くしまった土層である。中にあずき粒大の軽石を少量ではあるが含む。

#### 第VII層：明褐色ローム質土層

上層に対し、粒子がやや粗く、色調がやや淡くなる。

この略報では、第I層～第V層の中で、第III層下面～第IV層上面の縄文時代早期に絞り、触れていきたい。

### 3. 遺構について

#### (1) 壺穴住居

縄文時代早期に属すると考えられる壺穴住居址が4基検出された。内、3基は、切り合っている。これより住居址ごとに若干の説明をして行きたい。

##### [第1号住居址]

最大長2.74m、最大幅1.9mを測る胴張りのある小判形を呈する住居址である。壁高は25cm、最も深いところで30cmの皿形を呈している。底面は部分的にロームの貼り床がみられ、かなり、しっかりした床の状態を示していた。しかし、貼り床がみられない部分は、ニガシロが床面を成している。炉などの施設は認められない。

##### [第2号住居址]

最大長2.85m、最大幅2.10m(推定)を測る胴張りのある小判形を呈する住居址である。壁高16cm、最大深20cmの皿形を呈している。床面には1号住居址と同様、部分的なローム貼り床が認められ、それ以外の部分にはニガシロがある。床の状態はかなり良好である。炉は認められない。

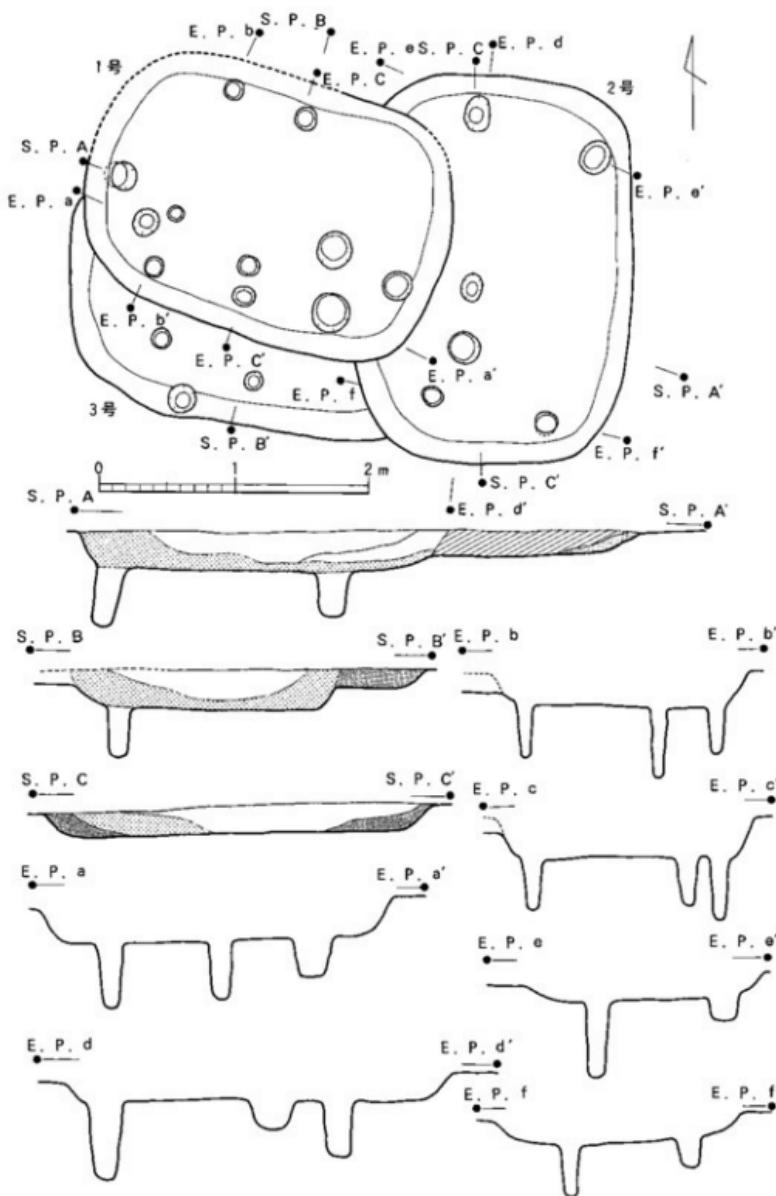
##### [第3号住居址]

最大長3.17m(推定)、最大幅2.54m(推定)を測る胴張りのある小判形を呈する住居址である。壁高13cmの同じく皿形を呈するものであろうか。

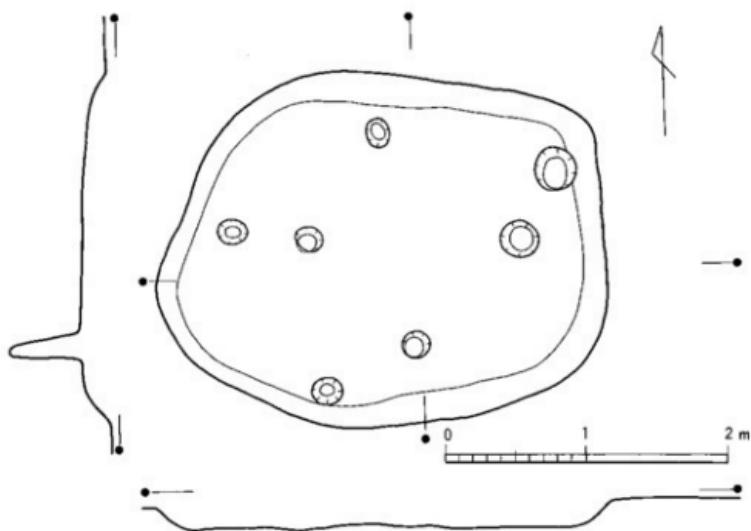
残置された床は、ニガシロによってなされ、良好な状態ではない。また、炉の存在は不明であるが、本遺跡の他の住居址からすれば、なかったと考えることが妥当であろう。

##### [第4号住居址]

最大長3.24m、最大幅2.54m、最大深18cmを測る不整形の住居址である。床面はすべてニガシロで、状態は良好ではない。この住居址にも炉は認められない。



第31図 穂穴住居址（1～3号）実測図



第32図 穂穴住居址（4号）実測図

### (2) 種群

これら竪穴住居址の他、縄文時代早期に属するものと考えられるものに疎群がある。疎群は、発掘区のはば全域にわたって認められるが、微視的に観れば、大きく2つのまとまりに分離することができた。すなわち北にひとつの集中部、南にもうひとつの集中部である。また、これらの集中の傾向に対応し、土器・石器の分布がみられた。

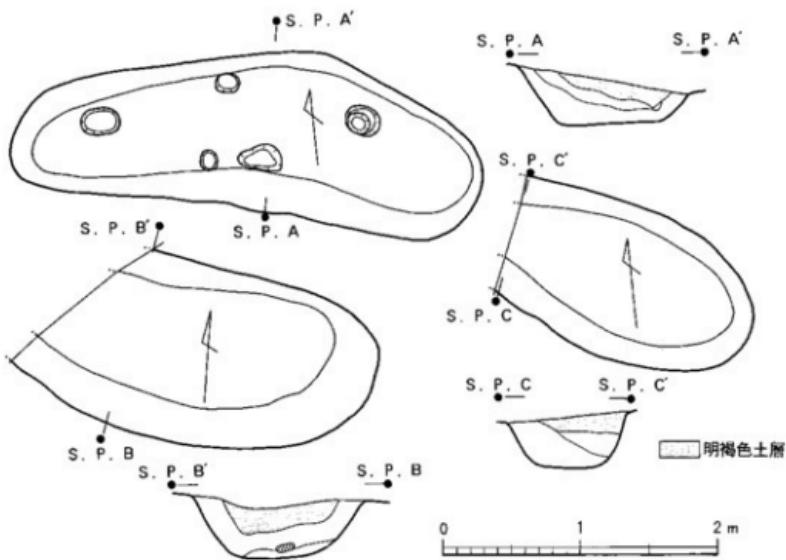
### (3) その他の遺構について

上記の遺構の他に、確実に当該期に属するものとは、断定できないが、3基の土壙がある。いずれも長楕円形の形状を示し、土層の堆積状況で最上層にアカホヤガラスを多量に含む明褐色の土層をのせる点で共通している。

**[第1号土壙]** 長径3.46m、短径1.17mを測り、最大壁高38cmの土壙である。床にはロームの貼床があり、浅い掘り込みが5個認められ、住居址状の遺構と考えてもよからうか。また貼床中より押型文土器・斜行縄文土器・条痕文土器・無文土器が出土した。

**[第2号土壙]** 長径約3.5m(推定)、短径1.3m(推定)、壁高40cm、最大深44cmを測る土壙である。この土壙堆積土層の第Ⅱ層下面及び床直上より斜行縄文土器3点が出土している。

**[第3号土壙]** 長径約2.65m、短径約1.1m、壁高38cm、最大深42cmを測る土壙である。出土遺物はない。



第33図 土壌実測図

以上3基の土壤の時期についてであるが、前記している様に3基とも堆積状況がかなり近似している点より、かなり時期的に近いものと考えられる。さらに、第1号土壤の貼床中より押型文土器・斜行縄文土器・無文土器・轟A式土器と貝殻条痕文土器が出土し、第2号土壤中より斜行縄文土器が出土していることから、縄文時代早期後葉～前期前半に比定することが可能となろう。このことは、土壤埋積最上層にアカホヤガラスを多量に含む層が存在することも、時期比定の上で裏付けられるようだ。

#### 4. 遺物について

本遺跡第Ⅲ層下面～第Ⅳ層上面出土遺物について、土器・石器別に略述したい。

土器は、押型文土器(山形文・楕円文・格子目文)及び斜行縄文土器が大部分を占め、無文土器・塞ノ神式土器・轟A式土器がみられた。押型文土器の主体をなすものは、山形文・楕円文である。器厚は、約2cmを測る厚手のものから薄手のものまでみられる。底部の形状は、尖底・平底の両様があった。また組織痕をもつ平底も出土した。

石器は、磨石・石皿・石鑿・くさび形石器・二次加工のある不定形石器が出土した。中でも、磨石は、石器全体の90%以上を占めている。

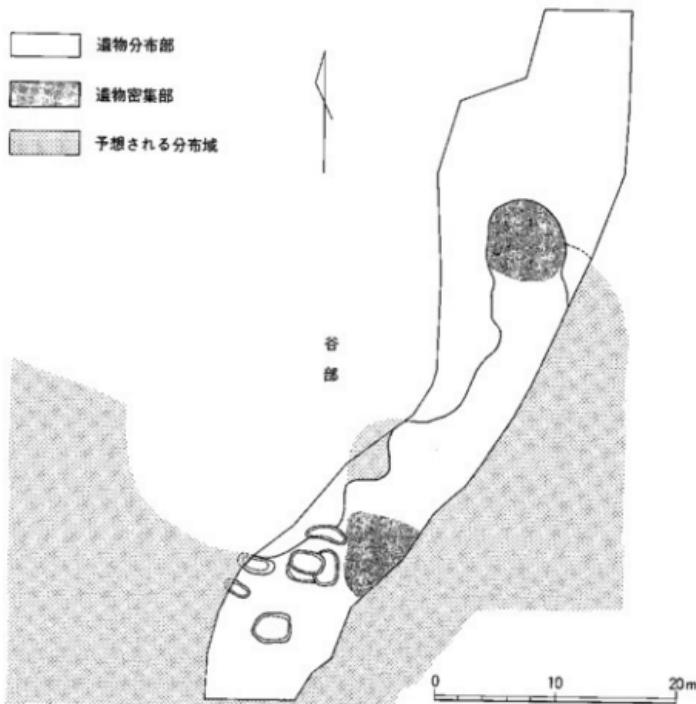
圧倒的量の磨石には、火熱を受けているものも見られ、中には、礫群の一部をなしているものがある。石鎚には、鉢形鎚・剥片鎚(表探)があり、本遺跡は量的に少ないと云はえ、長崎県岩下洞の様相に近似している。

## 5. 縄文時代早期の生活址について

### [庵ノ前遺跡の場合]

庵ノ前遺跡の発掘面積は、縄文時代早期の生活址を南北にたちわった形で、2000m<sup>2</sup>あまりの狭いものである。つまり、当該期の生活址を完全に発掘した訳ではない。従って、これをもって縄文時代早期の集落を語るには、まだまだ資料不足と言わざるをえない。従って、ここでは、遺物分布・礫群及び竪穴住居址の位置について略述して行きたい。

本遺跡は、平坦部から谷部へ向かう肩部にあたり、遺物・礫群の分布は、この肩にそった形でみられる。換言すれば、遺物・礫群が谷を囲む形で分布していることがわかる。そして、そ



第34図 発掘区及び遺物分布図

の分布は、先土器時代・土器出現期(原土器時代)の開地遺跡でみられる地点分布のあり方ではなく、帯状に拡がり、かつ、その分布範囲の中に相対として集中する傾向をもつ地点があるという特徴を示している。一方、堅穴住居址及び土壙は、帯状に拡がる遺物分布上にのり、かつ谷部の先端部に位置する。さらに、遺物、礫も、この部分に集中する傾向を示している。

こうした遺物の分布と堅穴住居址・土壙の位置が縄文時代の早期の生活空間(集落)の占地形態の一つとして考えることもできる。しかし、これはあくまでも、それぞれ両者の同時併存が前提とはなる。唯、土器の上からもそれほどかけはなれた時期ではないことが知れる訳で、生活空間(集落)における居住空間(堅穴住居・土壙)と活動空間(遺物・礫分布)との関係の一端が庵ノ前遺跡で明確になったことはたしかである。

## 6. 今後の問題点

人類社会が定住化指向の中で展開していったことは巨視的な視点から観ていけば明白である。すなわち「非定住(移動)→半定住→定住」(注)という図式の中で人類社会の展開的一面を捉えることも可能であろう。そうした中で縄文時代はどの段階にあらるのであろうか。

ところで、先土器時代の社会は、非定住の社会であり、その生活行動は離合集散を中心としていたと考えられている(春成 1976・近藤 1976・小野 1976)。一方、縄文時代の社会に関しては、最近短期定住の集落という考えが出されている(小野 1974)。しかしながら、これら二つの時代の社会観というものは、単にその時代、その時代を単独で論じたものであり、歴史的な流れの中で、例えば、先土器時代から土器出現期(原土器時代)、縄文時代へという推移の中で、社会がどのように変容していくのか、又していかないのかという観点からの考察というものが、集落研究の上で必要になるものと考える。その意味で、今回庵ノ前遺跡で確認された縄文時代開始の堅穴住居址・土壙は極めて重要な発掘資料といえそうだ。

(注) 定住については、一定の生産活動と同じ生活空間(集落)にいてなし、その生産活動が数度にわたって繰り返される場合と考えている。一方、半定住は、一定の期間、同じ生活空間(集落)に居住するが、生産活動をかえることによって生活空間(集落)もかえる場合と規定しておきたい。

### [参考文献]

- 小野 昭 「後期旧石器時代の集団関係」「考古学研究』23-1 1976年  
小林達雄 「縄文世界における土器の廃棄について」「国史学』93 1974年  
近藤義郎 「先土器時代の集団構成」「考古学研究』23-1 1976年  
春成秀爾 「先土器・縄文時代の画期について」「考古学研究』23-1 1976年

# 総 括

隈 昭 志

庵ノ前遺跡は平岡勝昭氏や東 光彦氏によって、早くから注目された遺跡で、縄文時代早期、後期、晩期及び弥生時代の甕棺などの遺物が採集され、熊本市立熊本博物館に保管されている。執者も昭和30年代の勧業会館（現産業文化会館）内にあった博物館で、東氏から遺物を見ながら説明を受けた記憶がある。

この遺跡は白川右岸の岩倉山と天拝山・立田山の間の谷部（標高約70m）にある。この一角に県立熊本北高等学校建設が計画され、2回にわたる発掘調査を実施したものである。

第1回の調査は高等学校建設の事前に、工事用取付道路部分について、昭和57年度に文化課参事 緒方 勉、同技師 木崎康弘が担当した。

調査面積は道路予定幅員のわずか500m<sup>2</sup>であったが、その当時としては県下で初めて縄文時代早期の竪穴住居址を平面検出することができた。竪穴住居址は4基があり、うち1号～3号は重複していた。平面形状は小判形を呈し、規模もほぼ同程度（1号2.74m×1.9m、2号2.85m×2.10m、3号3.17m×2.54m、4号3.24m×2.54m）である。断面形は皿形で、深さは13～30cmである。床面は第IV層のニガシロ面の上に部分的ロームによる貼り床（1～3号）であった。かなりしっかりとした状態で、いずれも炉は認められなかった。竪穴住居址の他に3基の土壙、北側と南側の2ヶ所に躰群が確認されている。

出土遺物としては、第III層下面～第IV層上面から押型文土器及び斜行縄文土器を主体に、無文土器、塞ノ神式土器、轟A式土器などのほか、石器では磨石を主体に、石皿、石鎌、くさび形石器などが出土している。

この時の調査は上述のとおり、本県最初の縄文時代早期の竪穴住居址の調査例であり、この経験が人吉地区の調査に大いに参考となるものであった。昭和58年度以降の大丸・藤ノ迫遺跡<sup>(1)</sup>（球磨郡山江村）、猩谷遺跡<sup>(2)</sup>（同村）、天道ケ尾遺跡<sup>(3)</sup>（人吉市）などがそうである。

第2回の調査は同高等学校の登校道路建設に伴うので、昭和63年度に文化課文化財保護主事 大田幸博、同課嘱託の松舟博満・原 葉子らが担当して調査したものである。長さ113m、幅10mについて発掘した結果、弥生時代の住居址1棟、柱穴などを検出した。住居址は3.5×2.8～3.0mを測るやや不整の長方形を呈する竪穴住居址で、壁面の深さ18～28cmである。床面から8個の柱穴が見つかったが、検討の結果、2本柱の上屋であったものと推測される。床面から検出された土器から弥生時代中期後半の時期であろう。

遺構に伴う遺物として住居址と同時期の土器片、縄文時代の押型文土器、塞ノ神式土器のほか、後期・晩期の土器や石器類が検出されている。

以上、最後に2回にわたる発掘調査によって、昭和30年代に注目された遺跡の全容を確認す

ることはできなかったが、縄文時代早期及び弥生時代中期の住居址を検出することができた。黒髪式土器系の壺棺片等も早くから採集されており、今後の周辺の開発に際しての適切な対応が必要である。

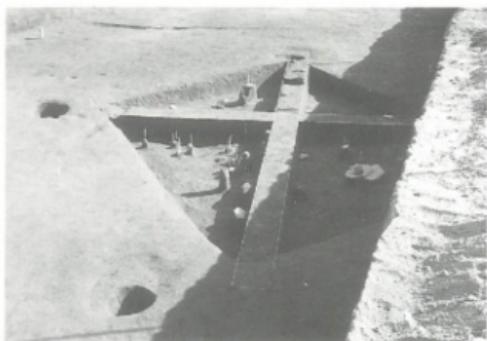
- 注(1) 平岡勝昭「熊本県発見の無土器文化の一例」熊本史学19・20 昭和35年  
熊本市文化財調査報告Ⅱ 北部地区 熊本市教育委員会 昭和46年
- (2) 木崎康弘「大丸・藤ノ迫遺跡」熊本県文化財調査報告 第80集 1986年
- (3) 木崎康弘「狸谷遺跡」熊本県文化財調査報告 第90集 1987年
- (4) 西住欣一郎「天道ヶ尾遺跡（II）」熊本県文化財調査報告 第111集 1990年

# 写 真 図 版

庵ノ前遺跡 I



調査区全景（北高校側より望む）



住居址検出状況(1)



住居址検出状況(2)

図版 2



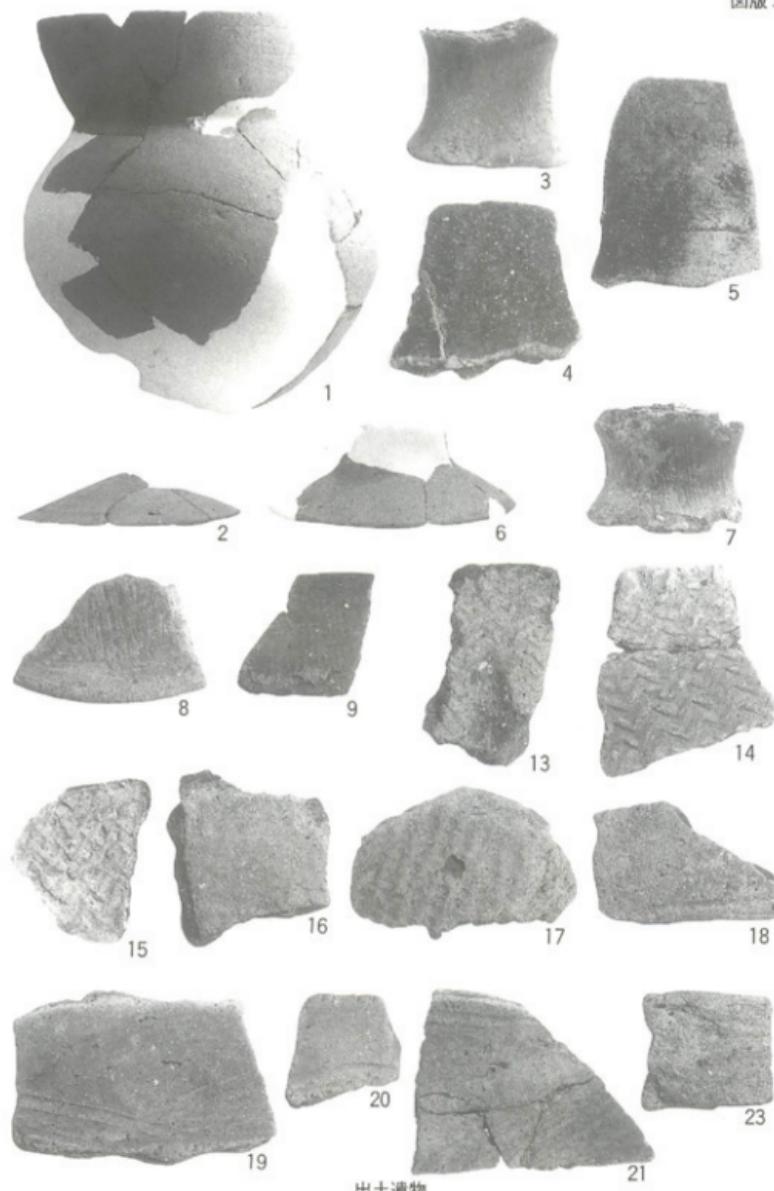
住居址検出状況(3)



柱穴検出状況

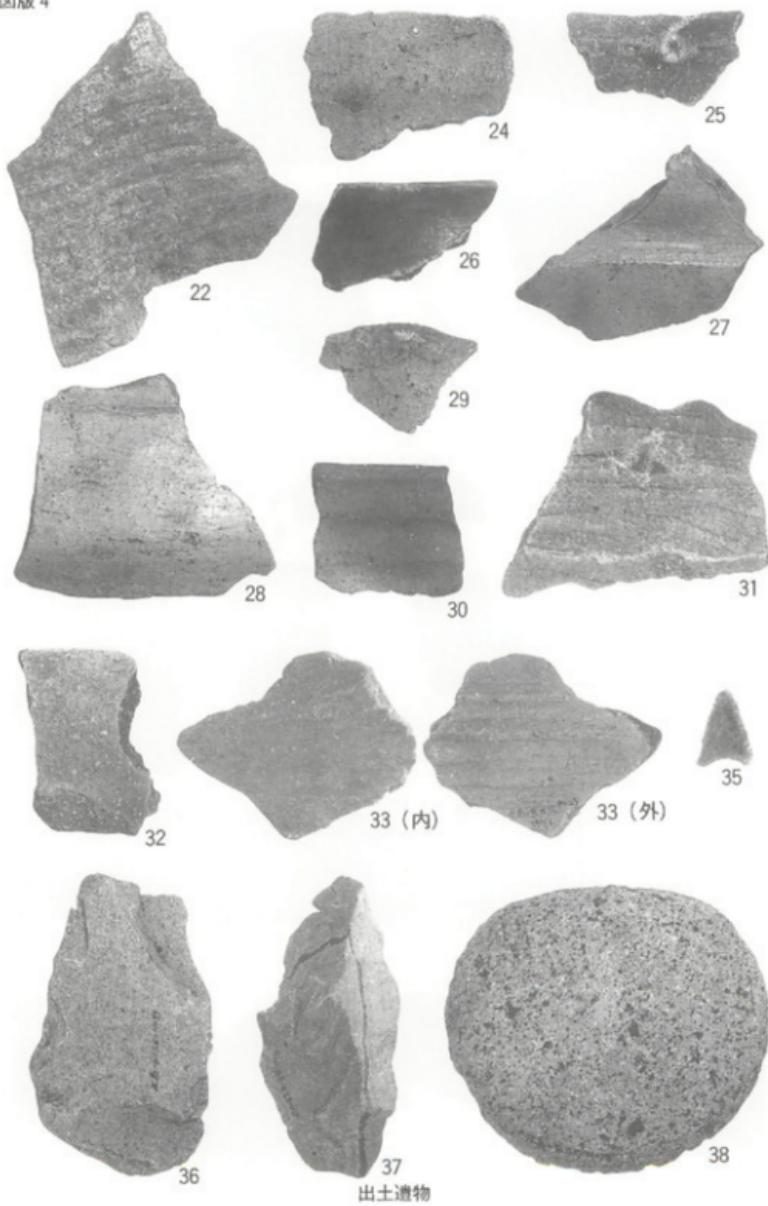


II区における岩盤検出状況



出土遺物

図版 4



庵ノ前遺跡Ⅱ



遺構全景



1～3号住居址



4号住居址

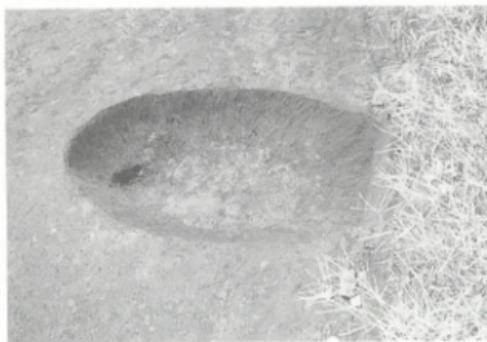
図版 6



1号土壤

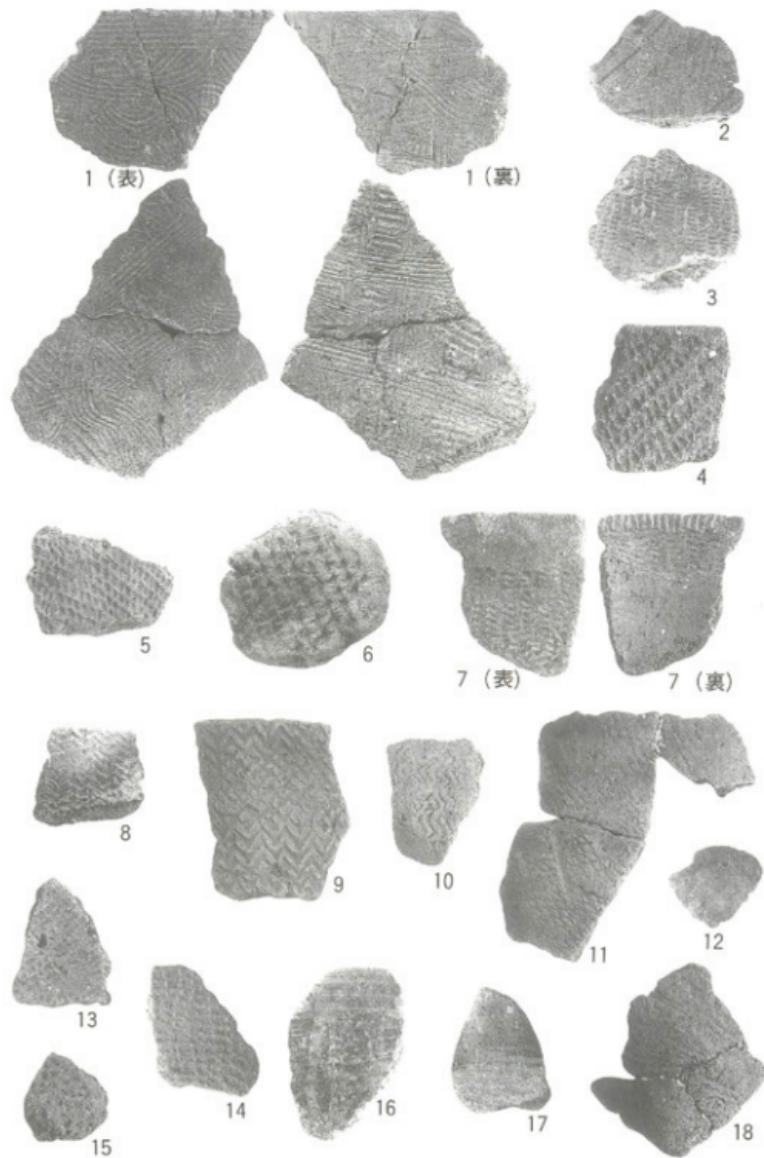


2号土壤



3号土壤

図版 7



出土遺物

熊本県文化財調査報告 第113集

## 庵ノ前遺跡 I・II

平成3年2月28日

編集発行：熊本県教育委員会

〒868 熊本市水前寺6丁目18-1

Tel 096-383-1111㈹

文化財調査第2係(内)6715

印 刷：株式会社 大和印刷所

〒862 熊本市戸島町920-1

Tel 096-380-0303

02 教委 教文  
② 003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 113 集を底本として作成しました。  
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用  
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図  
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用  
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：庵ノ前遺跡 1・2

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日